

グローバル化時代の今、文化多様性の価値を問う



人	類	学
研	究	所
通	信	第22号

2021

巻頭言	2
特集	
コロナとフィールド2	
コロナ禍と神戸南京町(張玉玲)	3
台湾のCOVID-19事情—台湾語を使用したユーモラスな情報発信—(藤川美代子)	5
COVID-19以降のデンマークにおける信仰と実存(ペーターセン・エスベン)	7
新型コロナウイルス時の現地調査—コンゴでの体験と思い出を中心に—(ムンシ・ロジェ・ヴァンヅラ)	9
アメリカ先住民とパンデミック(川浦佐知子)	12
オーストラリアにおける制限、ロックダウン、そしてフィールドワークの変化(ドーマン・ベンジャミン)	14
後藤明先生退職記念	
所長時代を振り返って(2010～2017年度)	16
アンソロポリウムの実践について(後藤明)	23
人類学フェスティバル2021★オンライン(宮脇千絵)	28
活動報告	32
研究業績	43
刊行物	46
スタッフ	47



南山大学人類学研究所

Anthropological Institute, Nanzan University

## 巻頭言

渡部 森哉 (人類学研究所・所長)

人類学研究所通信の2021年度版をお届けする。

2021年度も新型コロナウイルスに注意しながら手探りで活動を進めた。前号で「コロナとフィールド」という特集を組んだが、今号でも引き続き各フィールドにおけるコロナの実態について所員に報告していただいた。

2021年9月には、宮脇第一種研究所員の研究室が、第2研究棟の3階から宗教文化研究所・人類学研究所の3階の旧所長室に移った。それに伴い所長室は同じ3階のより広い部屋に移った。同じ建物に事務室と所長室、第一種研究所所員2名の研究室が配置されることで機動性が高まった。また所長室が様々な作業や打ち合わせのために人が集まる拠点として機能し始めた。研究室と所長室の移転に伴う手続きの労をとってくださった研究所総合委員会委員長である金先生をはじめとする関係者にお礼申し上げる。

宮脇所員は2021年9月まで経済学部経済学科にノミナル所属であったが、10月より人文学部人類文化学科にノミナル所属となり、学科と大学院の人類学教育により密接に関わることになった。人類学研究所の体制が安定してきたと言える。また、大学院人類学専攻博士前期課程修了生である古澤夏子さんが2021年度の途中から臨時職員として雑誌等の編集作業に携わってくださることになった。大学院と人類研の活動が有機的に結びついてきたことをうれしく思う。

2021年度は公開シンポジウムを2回開催した。1回目はオンラインで開催し、世界各地から参加があっ

た。2回目のシンポジウムは、まん延防止等重点措置が解除された後に、なんとかハイブリッド形式で無事に開催できた。今後でもできるだけ対面での開催を増やしていきたい。

共同研究「人類学・考古学における大きな理論と現場の理論」は2021年度で3年目の最終年度を向かえた。人類研設立70周年記念事業に併せて立ち上げられた共同研究であり、その成果は研究論集第12号として出版される予定である。

人類学フェスティバルは2021年度も引き続きオンラインでの開催となった。中京大学、名古屋大学の学生も参加し、研究発表の場、学生交流の場としても機能している。一方、これまで後藤先生が長年実施していたプラネタリウム企画は今回で最後となった。あらかじめ録画していた動画の配信であったが、多くの方が視聴し、名残惜しんだ。今後、人類学フェスティバルを盛り上げていくために、そのコンテンツ、開催形式など考えていきたい。

『年報人類学研究』も第12号を発行することができた。認知度が徐々に高まり外部から投稿が増えてきたことはうれしいことである。また査読の労をとってくださった方々にお礼申し上げる。

私は人類研の所長として2期目、4年目が終わり、引き続き3期目(2022年度-2023年度)も所長を拝命した。人類学研究所が研究のハブとして機能するように、より多角的に活動を展開していきたい。そのため、第二種研究所員をはじめとする関係者のより積極的なコミットメントをお願いしたい。

## 《コロナとフィールド2》

2021年もコロナ禍にあって多くの研究制限を受けた年であった。そこで前号に続き、今号でもふだん世界各地でフィールドワークをおこなっている研究所所員に、中国、台湾、デンマーク、コンゴ、アメリカ、オーストラリアでのコロナの状況や、それぞれの研究方法について報告してもらった。

## コロナ禍と神戸南京町

張玉玲 (人類学研究所・外国語学部アジア学科)

2019年末、中国武漢で原因不明の肺炎として発表された新型コロナウイルスは、その後急速な感染の拡大を見せた。日本では、特に香港の感染者が横浜と香港を移動するクルーズ船に乗っていたことが判明した2020年1月後半、新型コロナウイルスに関連する報道が一気に増加した。

日本の三大中華街の一つとして知られる神戸南京町は、1月19日、24日～26日に予定されていた春節祭を、計画どおりに実施した。私も1月25日にゼミの三年生とともに神戸南京町でフィールドワークを行うことができた。ただ、参加予定の学生数名が直前にキャンセルし、3名の男子学生のみ参加となった。のちの情報では、2020年1月の春節祭の来場者数は11万人に止まり、例年の半分以下となった。

その後、春休みに入った学生が観光に訪れたため、神戸南京町は一時的に回復したように思われた。しかし、3月末より複数の著名人の感染・死亡を含む新型コロナウイルスの厳しい感染状況が連日のように報道され、また、4月7日の日本政府による緊急事態宣言の発令もあって、南京町は店舗の9割が自粛休業となり、人出も9割減となった。

兵庫県神戸市中央区にある神戸南京町は、JR・阪神元町駅から徒歩5分、新幹線神戸駅から車で10分、ほかの地域のチャイナタウン同様、アクセスしやすい都市の中心部に位置する。東西270メー

ル、南北90メートル、決して大きいとは言えない空間に90店舗もあり、中華料理、中華物産、雑貨を扱う店が軒を連ねている。建物や看板の鮮やかな色、店内や出店から漂う独特な匂い、そして至るところから飛び交う中国語など、中国にいるようで中国ではない、エキゾチックな雰囲気を醸し出している。華僑と日本人が雑居して商店街としても機能していたが、1970年代、神戸市の都市開発の中で、チャイナタウンとして再開発されることになり、道路の整備や建物の改修など大幅な修繕が施されたほか、春節祭をはじめ中国に関連する年中行事も企画され、それに合わせて獅子舞や龍舞などの伝統芸能も披露されるようになった。以来神戸南京町の名は全国に知れ渡り、神戸を代表する主要観光地の一つとなった。神戸南京町の名称流用を防ぐために、1990年代、南京町商店街振興組合(戦前からあった市場組合を母体に1977年法人組織化した。構成メンバーは日本人と華僑が半々。以下では「組合」とする)は「南京町」の役務を「中華風の建築物群を中心とする遊園施設の提供、遊園地の提供、演芸・演劇又は音楽の演奏の興行の企画又は運営」と定め、商標登録を行った。

この、南京町の魅力であるはずの「中華らしさ」は、日本で新型コロナウイルスが確認された当初、風評被害で一時的にマイナスに捉えられ、観光客の減少につながったこともあった。4月以降、ほとんどの



店舗が休業し、観光客も来ない危機的状況の中、神戸南京町のイメージだけでも維持する必要があると考えた組合は、4月20日に南京町専用のチャンネルを新設し、太極拳をはじめ、神戸南京町の店舗、中華文化の紹介をオンライン配信で始めた。2021年と2022年の春節祭を中心とした中国関連イベントのオンライン配信も行った。

ある学会で「Covid19とチャイナタウン」というテーマで報告するため、私は緊急事態宣言解除後の2021年11月12日に、南京町を再訪した。修学旅行の小中学生の姿も目立ち、コロナ禍以前の神戸南京町の賑わいを少しばかり取り戻したように思えた。組合の理事長曹英生さんに南京町の状況や組合の取り組みについて説明を受けた中、何より印象深かったのは、今回のコロナ禍に対する組合のポジティブな考え方である。それは、1995年1月17日早朝に発生し、6400人余りの犠牲者を出した阪神・淡路大震災の経験、それを通して身につけた自信と、新たにできたネットワークに由来している。阪神・淡路大震災直後、いち早く復旧できたガスや電気を使って、南京町の十数軒の料理店がラーメンや水餃子、ステーキなどの暖かい食べ物を被災者に無料提供したこと、隣の元町商店街と共同で市民参加型の神戸まつりを実行したことなど、「がんばろうKOBE」という合言葉の中、地元の様々な団体と一丸となって震災後の復興に取り組んだ経験はいまだに生きているのである。震災による様々な不安、苦痛と恐怖が伴われる、この共通の記憶によって、南京町は「神戸」の南京町であり、互いに「運命の共同体」である認識は、より一層定着したように思われる。実際、南京町の専用チャンネルで配信されている、南京町の関係者と地元の知識人たちとの「コロナ禍の中の食と祭り」に関する会談を見ても、やはり阪神・淡路大震災の時の経験と教訓を参考にしているのがわかる。

「新型コロナウイルスは先が見えず恐ろしいのは確かだが、戦争よりはマシ。そう考えたら、幸せな時代に生きていると思える」と、インタビューの最後にあった曹さんの言葉は印象深かった。それは日中

戦争があった悲劇の時代を生きた両親のことを偲んでいるようにも感じたし、今日でも世界各地で戦争が起き、家族との死別の苦しみを抱えながら故郷を後にせざるを得ない人々を意識したようにも思えた。

一方、南京町に進出してきたいわゆる新華僑は貸店舗で営業しているケースが多く、一年半近く続く休業による損失があまりにも大きいため、閉店を余儀なくされたところもある。2003年より南京町にオープンされた中華料理店小小心縁は、1980年代に来日した福建省出身の陳挺さん夫婦が三宮で経営していた店を移転したものである。久しぶりにオーナーの陳さんを訪問した。しかし、2020年4月以降休業が続く中、日本政府より支給された補助金だけでは店舗の家賃も払えず、2021年8月をもって閉店したという。小小心縁の本場の味を知る私はたいへん遺憾に思ったと同時に、陳さん一家の今後を案じた。すると、「知人の勧めで新しい商売を始めようと考えている。ポストコロナでも流行るだろう」と、日本政府からの補助金申請のため、難解な日本語の書類とにらめっこしたと話したときに見せた笑顔と同じような明るい笑顔を見せながら、陳さんは打ち明けてくれた。危機に直面しても、常に前向きに挑戦しようとする南京町とその住人たち。これが南京町の素顔かもしれない。



老祥記の豚まんを購入するために列を作る人々  
(撮影日：2021年11月12日)



## 《コロナとフィールド2》

# 台湾の COVID-19 事情 ー 台湾語を使用したユーモラスな情報発信 ー

藤川美代子 (人類学研究所・人文学部人類文化学科)

私は2018年から、台湾東北部で海に潜って海藻や貝を採る人々（そのような女性を指す場合は、台湾でも「海女」と書く。発音は「ハイルー」）のもとでフィールドワークをつづけてきた。台湾では、中国の「疫情」（感染症の流行の意。つまり、コロナ禍）は日本などよりも早くから、ただならぬ緊張感をもって伝えられていた。未知のコロナウイルスによる感染爆発を武漢当局が把握し、中央の国家衛生健康委員会に報告したのは2019年12月30日だったとされるが、台湾政府はすぐにこの情報を入手して、翌31日には感染症対策を打つための閣僚会議が開催され、台湾到着の航空便で機内検疫を実施したほか、市民への注意喚起がおこなわれたのだ。

これを受け、マスクの買い占めと供給不足が憂慮されが、台湾の対応は早かった。政府は2020年1月24日にはマスクの輸出禁止に踏み切った。また、マスクを市民に混乱なく届けるためのシステム（ICカード式の保険証を使用した実名購入システムと、各薬局のマスク在庫数がわかるアプリの併用）も、わずか4日ほどで整えられた。立役者のIT大臣唐鳳（オードリー・タン）の名前が、日本でも称賛とともに報道されたことは記憶に新しいだろう。さらに、不織布マスクの9割を中国からの輸入に頼っていた台湾は、政府がマスク生産機を購入し、業者に生産してもらった製品をすべて政府が買い取るという体制を整えていった。これにより、3月には輸入不要の状態にまで生産量を上げ、翌4月には感染拡大が深刻な欧米の医療従事者に1000万枚を贈るというマスク外交までやってのけた。

日本と同様、台湾でもマスクの増産がトイレトペーパーの原料不足を招くと「謠言」（デマ）が飛び

交い、にわかにはトイレトペーパーの買い占めが人々の関心事となったが、台湾ではユーモアの効いた文句をSNSで拡散させることで「謠言」の収拾を図り、成功した。蔡英文総統のもとで首相を務める蘇貞昌が、自身の後ろ姿とともに、「咱只有一粒卡臣」（われわれのお尻は1つだけ。卡臣は、台湾語で尻を意味する「尻川」の音訳）と書かれたイラストをFacebookに投稿したのだ。ここには、トイレトペーパーは紙、不織布マスクは合成樹脂から作られており、マスクの増産はトイレトペーパーやおむつの生産を圧迫するものではないとの説明が並び、マスメディアも連日これを取り上げた。

台湾語とは、北京語由来の公用語「台湾國語」とは異なり、中国福建省南部で使われる方言を基礎とした言語で、主に1940年代以前に中国大陸から台湾へ渡ってきた人々とその後裔によって話されるものを指す。日本の統治下、つづく国民党の独裁政権下において、台湾語は使用が禁じられる憂き目にあってきたが、台湾出身の李登輝の総統就任を契機とした民主化と「本土化」（台湾化）の動きのなかでその力を取り戻しており、今では台湾の独自性を示すためのツールとして重視されるようになっている（話者は、台湾の人口の74%を占めるといふ。とはいえ、若い世代では母語は「台湾國語」で、台湾語は学校で習うものと捉える人も多い）。

COVID-19の封じ込め政策には、「卡臣」（尻）のほかにも台湾語が登場していた。たとえば、台湾は海外からの帰国者・入国者、濃厚接触者に対して、携帯電話の位置情報で所在を把握し、対象者が隔離期間中に自宅を離れたことがわかると最高で100万台湾ドル（約360万円）の罰金を科す（自

宅を離れた時間に応じて増額)という厳格な「居家檢疫」(在宅檢疫)を実施したが、これは「禁止趴走」というキャッチーな言葉で紹介された。「趴走」とは「あちこちほっつき歩くこと」を意味する台湾語で、幼い子を叱る時などに使われる言葉である。とりわけ、COVID-19の「本土確診」(台湾域内での市中感染)が現れはじめた2020年3月下旬には、自らの感染を知らながらバーやクラブに出かける若者などが「趴走」の例としてたびたび報じられ、批判を浴びた。

ちなみに私のインフォーマントの60代の男性は、テングサ漁の解禁(4月1日)までの閑散期を趣味の海外旅行に充てると言い、2020年3月1日から自ら団体旅行プランを組んで妻と友人たちをトルコに案内することを予定していた。このころすでに台湾からの出国は制限されていたものの、旅行のキャンセル料が高すぎるという理由で彼らはトルコ行きを決定し、帰国後は10日程度の自宅からの「趴走」禁止期間を経て、全員陰性が証明され解放されるという経験をした。彼はその後、無事にテングサ漁を開始し、6月には自ら晒した乾燥テングサや自家製のトコロテンを観光客相手に販売しはじめた(初期のCOVID-19感染封じ込めに成功した台湾政府は、5月あたにはCOVID-19とうまくつきあうための「防疫新生活運動」を展開しており、台湾域内の旅行も許されていた。日本はこのころ、第1回目の緊急

事態宣言のなかにあった)。台湾政府は景気回復策の一環として「振興三倍券」なるもの(通称「三倍券」。1,000台湾ドルで購入した商品券で3,000台湾ドル分の買い物ができる)を発行したが、これに関連して、この男性は「おもしろいものを作った」と言って一枚の写真を送ってくれた。そこには、「この屋台は小さいので三倍券は使用できません」という断り文句とともに彼の写真が貼られ、そのそばに「テングサを採る海男」と書かれたお手製の段ボール製看板が写っていた。私や共同研究者たちが、彼と同じようにテングサを採る女性たちのことを「海女」として特別視する様子を横目に、彼が新たに「海男」という自称を生み出した、そんな瞬間だった。

「祝大家身体健康、但願疫情赶快結束、早日再会!」(皆さまが健康でありますように。コロナ禍が早く終息し、一日も早く再会できることを切に願います)……この2年あまり、LINEで、FacebookのMessengerで、Eメールで、この言葉を会話の最後にしたためつづけてきた。これを使わずにすむ日は、いつやってくるだろうか。



「われわれのお尻は1つだけ」と書かれたイラスト(蘇貞昌氏のFacebookより)



東北部のテングサ屋台に登場した「海男」の看板(ご本人提供)

## 《コロナとフィールド 2》

# COVID-19 以降のデンマークにおける信仰と実存

ペーターセン・エスベン (人類学研究所・立命館大学言語教育センター)

ヨーロッパにおける COVID-19 に関する社会的な議論では、パンデミックはしばしば、社会的、経済的、政治的な危機、あるいは個人の心理的危機の原因として言及されることがある。

最近発表された Velux の資金提供による研究「COVID-19: Faith, Belief and Existence(2021)」では、コペンハーゲン大学とオーフス大学の研究者が、デンマークにおけるパンデミックの危機が人々の宗教的、実存的理解にどのような影響を与えたかを調査している。

デンマークだけでなく、日本やその他の国々でも、宗教がさまざまな方法でパンデミックに対処しようとしていることが、次第に明らかになってきている<sup>1)</sup>。Lene Kühle(2021)によれば、COVID-19 は、宗教が予測できない役割を果たすかもしれない、最初のパンデミックだと言える。それは、人々が必ずしも、はっきりと宗教的であるというわけではなく、宗教が、世俗化による差し迫った終焉の予測を確証していないためである。

死や苦しみと、宗教の関係についての古典的・近代的な宗教学の記述にあるように、宗教は個人の慰めや対処の手段とみなすことができるだろうか。24 時間内の感染者・死者数が更新され、それが再び増加傾向にあるとき、あるいは社会の全面的・部分的な停止が民間の経済を脅かすとき、デンマーク人は宗教的枠組に頼るのだろうか。友人や家族に会いたい、抱きしめたいという思いが強くなりすぎるとどうなるのだろうか。

これらは、Velux-survey が調査した問いの一部である。その結果が、即ちデンマークの状況を示唆してるとは限らない。しかし、デンマークの人々は、少なくとも宗教を重要視するという点では、世界で最

も世俗的な国の一つである。COVID-19 の危機がこれを変えるという兆候は、すぐにはない。国民の約半数が自分を信者だと言っているが、生活の中で宗教を特に重要視しているのは 10% 以下である。

したがって、デンマーク当局が 2020 年に宗教施設を閉鎖することは、デンマークの人々の COVID-19 の危機に対する認識には、直ちにほとんど影響を与えなかったようである。数少ない、宗教がほとんど意味をもたない場所では、危機を乗り越える人類の能力に対して信頼が置かれており、宗教的志向の強い人たちの間では、人類は大丈夫だということにより信頼を置く傾向があるようだ。

今回の調査では、回答者の約 3 分の 2 が自分自身が感染することを心配している。女性や高齢者層が最も心配しているが、男性では 9% と少なく、感染しても全く心配ないと答えている。個人的な問題としての感染への不安と精神的な健康状態との相関を見ると、感染への不安と精神的な健康状態の悪さは直結していることがわかる。若い女性は特に危機的な状況に陥っている。このグループでは、24% もの人が、うつ病や長期的なストレスのリスクが高いと考えることができる。このことは、パンデミックによって精神的にも経済的にも最も影響を受けるのは女性であるという、日本での同様の報告とも関連している<sup>2)</sup>。

全体として、COVID-19 の流行はデンマークの人々に不平等な形で影響を与えている。高学歴の人々の間では、感染のリスクに対する明確な懸念が見られ、それらの人々はまたマスク着用と手洗いへの意欲も高い。このグループは将来に対する希望を持ち、当局の措置を支持している。

しかし、教育水準が低く、所得水準も低い人々にとっては状況が異なる。このグループは特に「実存



的危機」とでも呼ぶべき兆候を示しており、将来に対する希望や、危機に対する可能な解決策が出てくるという確信が希薄である。

COVID-19 パンデミックに対するデンマーク当局の対応は、政府の政治的主導に対する国民の支持と、社会の二極化が明らかに限定的であることから、国際的に賞賛されている（これはドイツ、フランス、イギリスなど他のヨーロッパ諸国とは極めて対照的である）。しかし、この研究は、デンマークの悪名高い結束力が次第に圧力にさらされているように見えると指摘している。

例えば、Velux の調査によると、ウイルスが「秘密計画」の一環として開発されたといった陰謀論を信じる人が増えている（2020年5月:8%、2021年10月:16%）。

このように、デンマークでの COVID-19 の大流行は不信感を強め、西欧諸国の他の地域でも見られる、当局への信頼の二極化に関する仮説を裏付けているように思われる。

全体として、Velux 社の研究は、危機と宗教に関する理論に基づいた多くの仮定を確認することに失敗していると言える。COVID-19 の大流行は、デンマークにおける宗教復興にはつながっていない。しかし、多くのグループ（ほとんどが女性）がこの状況によってマイナスの影響を受け、精神的な問題が増加している。ただし、これらは宗教的な考え方に影響されているわけではない。

2021年11月の調査終了後、デンマーク社会では再び大きな変化が起きている。デンマーク政府はすべての制限を解除し、マスクさえも義務付けられなくなり、現在では国民の50%がCOVID-19に感染したと推定される。ここ数カ月の過激な動きが、デンマーク人の信頼、信仰、実存にどのような影響を与えたのか、それは今後の調査によってのみ明らかになるだろう。

註

1) (Andreasen 2020); (Kühle 2021)

2) <https://www.japantimes.co.jp/community/2021/03/18/issues/pandemic-harming-mental-health-women-youth-japan-tell-wants-help/>

参考文献

Andreasen, Esben 2020. "Coronavirus og japanske religioner," Japanskreligion.dk, Forlaget Univers. <https://www.japanskreligion.dk/userimg/125.pdf>

Kühle, Lene 2021. "Danish Muslims under COVID-19. Religion and pandemics in a post-secular society," Tidsskrift for Islamforskning/Scandinavian Journal of Islamic Studies,15(1): 13-39.



Majbølle Kirke, Denmark  
(撮影日: 2022年7月14日)

## 《コロナとフィールド2》

# 新型コロナウイルス時の現地調査 —コンゴでの体験と思い出を中心に—

ムンシ・ロジェ・ヴァンジラ (人類学研究所・国際教養学部国際教養学科)

### はじめに

新型コロナウイルスは多くの研究者に影響を与え、その研究手法の見直しを迫っている。このエッセイでは、私が2020年と2021年に計画した2つの研究プロジェクトにおけるコロナ禍の影響について報告する。これらの研究は、主にコンゴ民主共和国(以下コンゴを略する)のバンツー系母系社会であるサカタ族に焦点を当てたものである。本報告書の内容は、全体的に、文献調査と現地調査で学んだ筆者の体験と人類学者の著作(Rutherford 2020; Boukala and Cerclet 2020; Sourdril and Barbaro 2020 など)に基づいている。それらの点から、コロナ禍において未曾有の変化に対処するための適応力と創造性がある程度、身につけること、またその結果、サカタ族の現代社会を研究するための新しいプロトコル・研究課題、機会、責任を発展できたことを述べる。

### 2020年度の研究プロジェクト

2019年度の予備調査に続き、2020年8月から9月にかけて、コンゴで「サカタ族の伝統医学」に関する現地調査を実施する予定だった。しかし、2020年4月中旬からコンゴで施行されたコロナの危機における人々の移動や対面への制限は、フィールドワーク調査を必要とする研究プロジェクトの実施と完遂に予想外の課題をもたらした(Hume and Mulcock 2004; Yin 2009; Agar 2008)。実際、この前例のないコロナ禍の苦い経験は、Said (2012:191)が「亡命の奇妙な喜び」と表現したものと無関係ではない。これは、「どこにも完全に

属さないことで、世界全体を異郷の地として見る事ができる」場所があることを示している。したがって、「それはある種の独創的なビジョンを可能にする」(Chao 2020: #5)。

しかし、コロナ禍の大きさに鑑み、私の2020年度のコンゴでの現地調査プロジェクトのいくつかは、中止または延期せざるを得なかった。また、文献調査のみに焦点を当てた他の研究プロジェクトも、その後、関連する実証データの不足もあり、質の問題に悩まされることになった。この点で、私は特に「デジタル技術を駆使するか、物理的な郵便サービスを使って、やり取りできる書面などの非デジタルなアプローチを採用する」(Watson and Lupton 2022:1)ことによる遠隔アプローチの活用について検討した。それらには、デジタルや非デジタルな研究遂行の様式であるZoom、Skype、WhatsAppなどのビデオ会議ソフトウェアの採用(Howlett 2021)、モバイル・インスタント・メッセージング・アプリケーション(Kaufmann et al. 2001)、および遠隔参加型手法(Hall et al 2021)などがある。

Bekaert (2000)の理論的枠組みを基に、私はサカタ族の伝統医学と身体メタフィジカル・形而上な概念について調査し、その後、サカタ族の治癒行為とプロトコルに関連する神話をまとめた。これによって、身体に関するメタフィジカルな概念とフィジカルな概念を区別することができた。しかし、研究対象者(特に長期居住者やキー・インフォーマント)との直接の出会いがない状況で、信頼関係を築きながら、彼らの関心を維持することがいかに難しいかを実感した。同様に、研究対象者が自分たちの状況を見せることがとても困難だったことにも気づいた。実際、

研究者が研究対象者の家庭空間や身体的な動き、多くの健康指標や消費習慣やその周辺を観察することは、オンラインインタビューでは理解することができない。また、長年の経験から、オンラインでは得られない情報こそが重要であることも分かっている。さらに、人類学的研究の中心的なテーマは、研究者が予想もしない形で、研究協力者の言葉や現場での体験から生まれることが多いことにも注目すべきだろう。

## 2021 年度の現地調査

2019 年度の予備調査期間中に、74 か所村を組織しているマビエ首長制社会を中心に、サカタ族における社会史的・文化的側面の再調査の可能性を検討した。2021 年の夏から秋にかけて、コロナ禍の状況が少し改善されたので、そのフォローアップ研究のため、現地調査を行う機会を得た。

## 「遠隔」モードでのフィールド調査

おそらく、最も明白な結果は、当初計画した方法論に関するものだろう。現地では、対面でのインタビューや文脈的な会話、集合的な会議など、研究活動の一部をオンラインで「遠隔化」しなければならなかった。この点に関して、私の現地調査チームは、Zoom、Whats App、Skype/ビデオ会議プラットフォームを通じて、現地にいる研究対象者とコミュニケーションを取るために、より頻繁に、定期的にソーシャルメディアを使用することを、可能な限り選択した。これは、いわゆる「デジタルエスノグラフィー」であり、研究参加者も未曾有の事態に対する懸念や恐れを共有する機会を持つことができた。

例えば、2022 年 1 月 24 日、私はデジタルエスノグラフィーを使って、名古屋市からサカタ族のマビエ首長制社会の最高責任者ジャン=ピエール・ケヴィン・ケンゾー氏 (74 歳) の喪と葬儀を追うことができた。Kaler や Beres (2010)、および Muncey (2010) の研究に照らしても、この方法は、マビエ首長制社会との共同遠隔調査を行う上で、最も効果的な方法だと思われる。その際、私は意図的に住民の役割

を変えた。単に研究対象者としてではなく、考察と分析のプロセスに関わる協力者になってもらったのである。

## おわりに

現地で感じたのは、コロナの流行がもたらす影響とそれに関連する課題は、私を含む多くの研究者の研究の分野・性質によって大きく異なるということである。コロナ禍が過ぎ去れば、オンラインとオフラインのコミュニティ・ライフの結びつきが強化される可能性がある。これらの手段や方法が、人類学的研究から必ずしも消え去る運命にあるのではなく、研究者の通常のツールボックスに統合されることは間違いないだろう。したがって、私を含む人類学者や民族誌学者には、こうした新たなトレンドの動向を把握し、それを考慮した上で方法を適応させる責任がある (Rutherford 2020)、という主張に同意したい。

## 参考文献

- Agar, M.H.  
2008. *The Professional Stranger: An Informal Introduction to Ethnography*. Second Edition. Bingley: Emerald.
- Bekaert, S.  
2000. *System and Repertoire in Sakata Medicine*. Democratic Republic of Congo. Uppsala: Acta Universitatis Upsaliensis.
- Chao, S.  
2020. "When Crisis Brings Us Closer: Reflecting on Family, Fieldwork, and Faraway Homes in the COVID-19 Pandemic." *Science, Medicine, and Anthropology*, March 31, 2020. <http://somatosphere.net/2020/when-crisis-brings-us-closer-refleting-on-family-fieldwork-and-Farway-homes-in-the-covid-19-pandemic.html/> [Accessed on 18/05/2022].
- Hall, J., Gaved, M., and Sargent, J.  
2021. "Participatory Research Approaches in times of Covid-19: A Narrative Literature Review." *International Journal of Qualitative Methods* 20:1-15. <https://doi.org/10.1177/16094069211010087>. [Accessed on 18/05/2022].
- Howlett, M.  
202. Looking at the 'field' through a Zoom lens: Methodological Reflections on conducting online research during a global pandemic. *Qualitative Research*, (Online first). <https://journals.sagepub.com/doi/pdf/10.1177/1468794120985691>. [Accessed on 18/05/2022].
- Hume, L. and Mulcock, J. (eds.)  
2004. *Anthropologists in the field: Cases in Participation Observation*. New York: Columbia University Press.
- Kaler, A. and Beres, M.



2010. *Essentials of Field Relationships*. Walnut Creek, CA: Left Coast Press.

Kaufmann, K., Peil, C., and Bork-Hüffer, T.

2001. "Producing in situ data from a distance with mobile instant messaging interviews (MIMIs): examples From the COVID-19 pandemic." *International Journal of Qualitative Methods* 20:1-14 <https://doi.org/10.1177/16094069211029679>. [Accessed on 18/05/2022].

Muncey, T.

2010. *Creating Auto-ethnographies*. Los Angeles, London, New Delhi, Singapore, Washington DC: Sage Publications.

Rutherford, D. (ed.)  
2020. The Future of Anthropological Research: Ethics, Questions, and Methods in the Age of COVID-19: Part I. The Werner-Gren Blog. <http://blog.wennergren.org/2020/06/the-future-of-anthropological-research-ethics-questions-and-methods-in-the-age-of-covid-19-part-i/> [Accessed on 15/05/2020].

Said, E.

2012. *Reflections on Exile: And Other Literary and Cultural Essays*. London: GRANTA Books.

Sourdril, A. and Barbaro, L.

2020. "Écouter le silence: Ethnographie et pandémie, comment faire du terrain en temps de confinement?" *Carnets de Terrain*. <https://blogterrain.hypotheses.org/16329> [Accessed on 15/05/2022].

Yin, R.K.

2009. *Case Study Research: Design and Methods*. Fourth Edition. (Applied Social Research Methods Series, Volume5). Los Angeles, London, New Delhi, Singapore, Washington DC: Sage Publications.

Watson, A and Lupton, D.

2022. "Remote Fieldwork in Homes During the Covid-19 Pandemic: Video-Call Ethnography and Map Drawing Methods." *Journal of International Qualitative Methods* 21:1-12. <https://doi.org/10.1177/16094069221078376> [Accessed on 12/05/2022].



写真1 マビー首長制社会の最高責任者ジャン＝ピエール・ケヴィン・ケンゾー氏がサカタ族の伝統的な薬を紹介している。  
(撮影:筆者、2019年9月5日)



写真2 サカタ地域の首長制社会の最高責任者。  
(撮影:マビー首長制社会の最高責任者のアシスタント、2019年8月25日)

## 《コロナとフィールド2》

### アメリカ先住民とパンデミック

川浦佐知子 (人類学研究所・人文学部心理人間学科)

Covid-19の感染確認から2年余りが経つ。2020年3月上旬、感染者16名であったアメリカ合衆国では、感染力の強いオミクロン株が拡大のピークを迎えた2022年1月中旬、1日平均80万人の感染者を生み出す事態に至った。ジョンホプキンス大学によれば、合衆国では2022年3月末時点で通算約8000万人の感染、97万8000人の死亡が確認されている。私が調査地とするノーザン・シャイアン部族保留地があるモンタナ州では、約27万2000人が感染し、少なくとも3246人が亡くなっている<sup>1)</sup>。

衝撃的な事実だが、アメリカ先住民<sup>2)</sup>が瀕する窮状はこうした数値では見えてこない。コロナ感染拡大による地域社会・共同体へのダメージは不均衡であり、脆弱な集団はより大きな脅威にさらされてきた。6つの先住民保留地を有するモンタナ州では、2021年2月中旬時点で、人口10万人あたりの白人の死亡者が105人であるのに対し、先住民の死亡者は約7倍の737人であった<sup>3)</sup>。2021年8月の時点で、ノーザン・シャイアン部族では50人の死亡が確認されており、これは保留地人口の1%に当たる<sup>4)</sup>。共同体人口の1%が失われるという事態は異常である。

部族も無策であった訳ではない。国家非常事態宣言直後の2020年3月14日、ノーザン・シャイアン部族評議会是非常事態宣言を発出し、高齢者施設訪問の制限、夜間外出の禁止、保留地境界を跨いでの移動の制限、移動後2週間の健康観察、非部族メンバーの保留地訪問や大規模集会の禁止、部族カジノの休業を定めた。最近ではオミクロン株の感染拡大を抑制するため、2022年3月半ばまでマスク着用の義務化、25名以上の集会に際しての事前検査での陰性の確認、保留地内ビジネスの週2日の休業といった非常事態対応を求め、教育現場に

もリモート学習が呼びかけられた。

部族内では、「エルダーを守り、共同体を守る」のスローガンの下、ワクチン接種が積極的に進められてきた。合衆国人口全体において、先住民のワクチン接種率はどのエスニック集団よりも高い。2021年10月23日時点で、二度のワクチン接種を終えていた白人人口が全体の40.9%であったのに対し、アメリカ先住民では51%が接種を完了していた。背景には連邦政府が早い段階で先住民部族のためにワクチンを手配し、ワクチンの配布や接種の優先順位の決定を各部族に委ねた経緯がある。ワクチン接種の推奨を誰がどのように伝えるのかは、主流社会に対する不信を拭えない先住民共同体にとって重要な鍵となる。部族政府は、「自分の身を守るためのワクチン接種」という一般的なメッセージをそのまま流用するのではなく、「高齢者を守ることで、共同体独自の文化、伝統、言語を守る」ことを主眼として、部族メンバーにワクチン接種を呼びかけた<sup>5)</sup>。

こうした努力によってワクチン接種は進んだが、感染拡大は多くの先住民の命を奪った。コロナ感染による先住民死亡率の高さは、感染によって重篤な状態に陥りやすい糖尿病や心疾患といった慢性疾患を抱える者が多いことや、恒常的な貧困率の高さによる。先住民人口の割合の高い6つの州では、先住民死亡者の40%以上が65歳以下であり、共同体を担う中心となる年齢層に大きな影響が及んでいる。高齢者への影響も深刻で、モンタナ州在住の85歳以上の先住民の4.6%、75歳以上84歳以下の3.8%がコロナ感染症で亡くなっている<sup>6)</sup>。これは、伝統の復興、部族言語の普及に注力する部族にとって大きな喪失である。

私が最後にノーザン・シャイアン保留地を訪ねたのは2019年9月。もう3年近く、現地に足を踏み

入っていない。昨年は現地で最も頼りにしていた知人夫妻の訃報を相次いで受け、肩を落とした。50歳を越えて生きることが簡単ではない保留地で、二人は80代半ばまで生きた。親族一同が会する集まりの輪の中心に、いつも二人の姿があった。何があっても温かく迎えてくれる二人の存在は、若い孫、幼い曾孫たちにとってかけがえのない存在だった。同化政策下、二人は部族言語や部族信仰を否定されて育った。1950年代、連邦の先住民都市移住計画で保留地を離れ、カルフォルニア州やユタ州で暮らした時期もあった。1970年代、夫妻はティーンエイジを迎えた3人の子どもと共に保留地に戻ったが、夫と子どもはアルコール依存に向き合うことになった。「人生に苦難は織り込み済み」と二人は困苦を引き受け、その途上で伝統の価値を見出した。彼らが語った人生の語りを忘れることはない。再び保留地を訪れるなら、何処に車を走らせても、何を見ても、私は彼らを思うことになるだろう。

アフターコロナ時代の保留地の姿はどのようなものとなるのか。2020年3月末に成立した総額約2.1兆ドルの緊急経済対策「コロナウイルス支援・救済・経済保証法(CARES法)」は、先住民部族にもコロナ感染対策、小規模ビジネスや部族政府の運営、リモート教育の支援のための基金提供を約束した。ノーザン・シャイアンも約2000万ドルの基金を受け取ったが、基金利用に係る制限のため、CARES法を不備だらけの保留地インフラを整える機会とするのは難しい。部族メンバーの経済的困窮は深く、2022年初頭には二度目の個人給付金の配当が案内されている。部族は当面の課題を解消するのに手一杯であるが、新たな兆しも見える。

コロナパンデミックは、先住民が社会調査から排除され続けてきた事実を明らかにした。感染者のエスニック分類において、先住民は「その他」に振り分けられることが多く、州が発表するデータでも先住民の情報については欠損が多い。アリゾナ大学ネイティブ・ネイション研究所は、「先住民データ主権」を掲げてデータ収集・分析による部族自治の強化、政策への反映を目指している<sup>7)</sup>。ノーザン・シャイアン

部族メンバーで、現在UCLAで教鞭をとるロドリゲス・ローンベアは、パンデミック初期の段階から先住民保留地での実態把握調査を行い、部族文化に即した感染対策メッセージの発信や、保留地インフラの整備が感染抑止の鍵となると論じている<sup>8)</sup>。ローンベアの親世代は1960年代、先住民運動の最中に育ち、成人となってからは石炭開発から部族保留地を守るために戦った。「データ戦士」を名乗るローンベアは、異なる手法で先住民の未来を拓くことになる。新たな継承のかたちがあるように思う。

註

1) Karina Zaiets, Mitchell Thorson, Shawn J. Sullivan & Janie Haseman, "US COVID-19 map: Tracking cases and deaths," USA Today, <<https://www.usatoday.com/news/coronavirus/>>

2) 本稿では「アメリカ先住民」にアラスカ先住民を含める。

3) Randall Akee & Dara Reber, "American Indian and Alaska Natives are dying of COVID-19 at shocking rates," Brookings Report. Feb. 18, 2021. <<https://www.brookings.edu/research/american-indians-and-alaska-natives-are-dying-of-covid-19-at-shocking-rates/>> 2021年2月中旬、日本での人口100万人あたりの死者数は145人。

4) Nina Lakhani, "Exclusive: Indigenous Americans dying from Covid at twice the rate of white Americans," Guardian, Feb. 4, 2021. <<https://www.theguardian.com/us-news/2021/feb/04/native-americans-coronavirus-covid-death-rate>> ノーザン・シャイアン登録部族メンバーは1万人余り。うち約半数が保留地に居住する。

5) Celeste E. Whittaker, "Native Americans Have the Highest U.S. COVID-19 Vaccination Rates," U.S. Medicine, Nov. 15, 2021. <<https://www.usmedicine.com/clinical-topics/covid-19/native-americans-have-the-highest-us-covid-19-vaccination-rates/>>

6) Akee & Reber, "American Indian and Alaska Natives are dying of COVID-19." ニューメキシコ、モンタナ、アリゾナ、ノースダコタ、サウスダコタ、オクラホマの6州での数値。白人では、65歳以下の死亡者は全体の11%に止まる。

7) Stephanie Carroll Rainie, Desi Rodriguez-Lonebear & Andrew Martinez, "Policy Brief: Data Governance for Native Nation Rebuilding Version 2," Native Nations Institute, <[http://nni.arizona.edu/application/files/8415/0007/5708/Policy\\_Brief\\_Data\\_Governance\\_for\\_Native\\_Nation\\_Rebuilding\\_Version\\_2.pdf](http://nni.arizona.edu/application/files/8415/0007/5708/Policy_Brief_Data_Governance_for_Native_Nation_Rebuilding_Version_2.pdf)>

8) Desi Rodriguez-Lonebear, Nicolás E. Barceló, Randall Akee & Stephanie Russo Carroll, "American Indian Reservation and COVID-19: Correlates of Early Infection Rates in the Pandemic," Journal of Public Health Management and Practice, July/August 2020, Vol. 26-Issue4: 371-377.

\* URL 最終閲覧は全て2022年3月30日。



## 《コロナとフィールド2》

# オーストラリアにおける制限、ロックダウン、 そしてフィールドワークの変化

ドーマン・ベンジャミン (人類学研究所)

コロナ禍の中で、オーストラリアにおけるフィールドワークや一般的な高等教育に与えた影響は、同国の研究機関に多面的な影響を及ぼしている。明らかに、渡航に関しても、オーストラリア国内および海外でフィールドワークを行うオーストラリア在住の研究者に大きな影響が及んでいる。

この点は、チベットの河川の環境史に関連するプロジェクトの一環として、2021年度第1回公開シンポジウムのオンラインイベントで“Beyond the Silos: Big Problems like Climate Change Require New Approaches”「サイロを超えて：気候変動のような大きな問題は新しいアプローチを必要とする」と題して講演したオーストラリア在住の研究者が強調していた。

このプロジェクトに参加した人類学者、科学者、歴史家は、チベットの河川に関するデータを直接入手することの難しさに言及し、研究者が世界的に直面している制約を浮き彫りにした一方で、オーストラリア国内の比較データへのアクセスの難しさについても言及した。

パンデミックが始まって以来、オーストラリアの各州・準州はそれぞれ異なる状況や課題に直面した。ビクトリア州では、ドイツの国営国際放送局 DW ニュースなど、一部の国際メディアから「世界で最も厳しい」規制が行われたと言われている<sup>1)</sup>。例えば、ビクトリア州の州都メルボルンでは、州警察によって6回の封鎖が行われた。公共の場でのマスク着用を拒否したり、必要不可欠な労働者（例えば医療従事者、警察、公共交通機関の職員など）ではないのに市内の別の場所に移動するなど、ロックダウンのルールを破った人々には重い罰金が課された。

各州のロックダウンが州をまたぐ旅行にも影響が及び、旅行に出たら帰れなくなるのではと心配する人もいた。

研究機関では、オーストラリア国立大学の ANU Humanities and Social Sciences Guide to Fieldwork Strategies in Response to COVID-19<sup>2)</sup> (人文・社会科学系 COVID-19に対応したフィールドワーク戦略の手引き) など、フィールドワークに対応するためのガイドを作成している。このガイドは、共著の基準が学問の境界でどのように異なり、また交差するかなど、フィールドワークに対する長期的な影響を認識している点で有用な文書である。また、研究の普及や一般へのアウトリーチにも影響が出ること、参加型観察、考古学的発掘、知識の交換など、一部のフィールドワークは、代替のデータ生成様式に容易に移行できないことも指摘されている。前述の公開シンポジウムは、全く異なる分野の研究者が、学問の境界を越えて共著に対処する好例であった。

このガイドでは、研究者が直面する障害、コロナ禍の中で従来のフィールドワーク手法がもたらす物理的リスク、フィールドワークの継続的な制限に関連するリスクについて概説するとともに、研究参加者やそのコミュニティと新しい革新的なやり方で関わる方法、コミュニティの資源、技術、スキルを評価するという観点から、研究者に機会を与えていることを指摘している。また、研究者がコミュニティとの関わりにおいて、どのようなことが可能であるかを探る方法を提案している。

しかし、オーストラリアを拠点とする研究者が直面した個人的な課題についてはどうだろうか。

2022年2月21日にオーストラリアが海外からの入国者に国境を開放するまで、オーストラリアでは700日近く、特別な状況を除き、市民以外の入国を認めない国境閉鎖が続いていた。オーストラリアの研究機関でのフィールドワークを必要とする博士課程に在籍する留学生の中には、パンデミック発生時にすでにオーストラリアに滞在していた者もいた。

例えば、バングラデシュの博士課程学生、ゼーナトゥル・イスラムは、オーストラリアの教育機関で農業と経済に関するプログラムに登録した<sup>3)</sup>。しかし渡航禁止のため、彼女は直接フィールドワークをすることができなかった。彼女が直面した問題は、彼女の研究がすべて量的なものであるため、データの質が特に重要なので、フィールドワークのモニタリングはオンラインで続けていたが、この状況は彼女の研究計画やスケジュールに明らかに影響を及ぼしている。

オーストラリアの報道機関、SBS Hindi氏によると<sup>4)</sup>、もう一人の留学生、サンジャナ・バードワジはシドニーでインドのディアスポラを研究しているようだ。彼女は参加者と事前にコンタクトを取っていたものの、「パンデミックが発生すると、私の参加者はそれぞれの問題を抱えてしまい、研究は誰にとっても優先されるものではなくなった」と言及している。同様に、中東のイスラム女性のオーストラリアへの移住を研究しているオーストラリアのフィールドワーカー、ルバブは、パンデミック以前は街のカフェやモスクにチラシを置けば、参加者が自ら声をかけてきてくれたのに、パンデミックが始まってからは苦勞しているとのことである。両氏は、オンラインでは限界があるのに対し、対面では研究者と参加者の信頼関係が築かれるため、より多くのことを理解することができるかと述べている。

また、国際的な国境が閉鎖され、留学生が入国出来なくなったことで、オーストラリアの教育機関は財政難に陥り、研究資金が直接的に影響を受けたことも要因のひとつと考えられている。特に、パンデミック発生時からすでにオーストラリアを拠点としていた留学生の場合は、その傾向が顕著である。

2022年3月2日、人類学者でオーストラリア国立大学開発政策センターの연구원であるマイケル・ローズ

氏にZOOMでインタビューを行った。彼の主な研究テーマは東ティモールからオーストラリアへの労働移動で、オーストラリア政府の労働イニシアティブである季節労働者プログラムに焦点を当て、この新しいお金と経験の源が東ティモールの生活をどのように変え、オーストラリアに到着した東ティモール人労働者がどのように生活しているのかに注目している。マイケル自身、参加者へのアクセスという点で、州をまたぐ移動の制限に直面したことに加え、出国できない参加者が直面したいくつかの問題にも言及した。このプログラムは季節労働制であるにもかかわらず、これらの労働者はオーストラリアに留まることを余儀なくされているのである。このことは、彼自身のフィールドワークと参加者の生活の両面で、彼が今まさに受け入れようとしていることなのである。

オーストラリアが国境を開いたことで、オーストラリア国内でのフィールドワークやアクセスに関する状況は変化していくと思われる。しかし、国内での渡航制限はまだ一部の地域で実施されており、オーストラリアでのパンデミックの経験から、異なる多様な影響を受けて、突然、新しい制限が設けられる可能性があることが分かっている。パンデミックは、今後数年間、フィールドワークや研究発表の新しいあり方を考え直す多くの機会を提供することは明らかである。

註

1) <https://www.dw.com/en/covid-digest-australia-reopens-borders-after-nearly-two-years/a-60851986> (アクセス日 2022年2月27日)

2) <https://www.anu.edu.au/files/guidance/ANU%20Guide%20to%20Fieldwork%20Strategies%20in%20Response%20to%20COVID-19%2C%20v1.0.pdf> (アクセス日 2022年3月3日)

3) “PhD Student in Australia Left Unable to Undertake & Monitor Fieldwork In-Person,” <https://collegenews.org/phd-student-in-australia-left-unable-to-undertake-monitor-fieldwork-in-person/> (アクセス日 2022年3月7日)

4) <https://www.sbs.com.au/language/english/audio/not-a-priority-for-anyone-how-covid-19-has-impacted-research-students-in-australia> (アクセス日 2022年3月7日)

## 特集

### 後藤明先生退職記念

## 所長時代を振り返って（2010～2017年度）

話し手：後藤明（人類学研究所・人文学部人類文化学科）

聞き手：宮脇千絵（人類学研究所）

**宮脇：**今日は後藤先生に所長時代の活動についてお聞きします。というのも、本誌の前身である『人類学研究通信』（1992～2010年）が刊行されていた頃は、人類学研究所（以下、人類研）の毎年の活動報告が記録されていたのですが、その後2018年まで刊行が途切れていました。活動の記録はウェブサイト上にもあるのですが、一度、体系立てて記録しておく必要があるだろうとのことで、後藤先生に当時を振り返っていただきたいと思います。

先生は改組後の2010年から2018年3月まで所長をされていました。まず、先生が始められたユニークなイベントである人類学フェスティバル（以下、人類学フェス）について教えてください。

**後藤：**人類学フェスを始める前は星空人類学を開催していました。2009年のことです。2009年はガリレオが天体観測を始めてから400年目の年で、国際世界天文年といって世界中で天文学のイベントがおこなわれた年でした。日本でも400周年のイベントが開催されました。私はコネクションがあって東京の三鷹の国立天文台でのイベントの企画委員を任されていました。天文学の教育はプラネタリウムでおこなうことが一般的ですが、もう少し文化的な観点から天文学にアプローチしたいと思ったことが、星空人類学を始めたきっかけです。

もうひとつ星空人類学を始めたきっかけは、プラネタリウムを扱っている五藤光学研究所の人と知り合いになったことです。私が世界天文年に南山大学でも何かやりたいと相談したところ、エアドーム式の



プラネタリウムでイベントができることを教えてくださいました。とはいうものの、機械の操作や解説は専門家じゃないとできないと思っていたので、プラネタリウムを借りて専門家に来てもらおうと考えていました。しかしカリスマ解説員で有名な永田美絵さんに、毎年立川市の成人式で新成人にプラネタリウムの解説をさせていると聞いたので、彼女に「うちの学生でも解説できますか」と尋ねたところ、「できますよ」ということでした。そこでシナリオを作ってプラネタリウムをおこなったのが、2009年の星空人類学でした。この時はまだ人類学フェスティバルという言葉は使用していませんでした。

**宮脇：**あれだけのゼミ生をご自身の研究領域に引き入れる技というものはどういったものなのでしょうか。

**後藤：**ある意味でカリスマになることです。「この先



生についていけば、何かおもしろいことがありそうだ」と思わせるということだと思います。

うちのゼミに入ってくる学生は、目的をもってゼミを選んでくるので有無を言わせません。高い目標の課題をいくつか与えて、それにチャレンジさせます。私は極力、細かいことは言いません。例えていうと私は行政と対応したり、資金を獲得して公園を作る、そしてその公園の中に遊具を置いておく、その遊具でどう遊ぶかは学生の自由に任せる、そのようなイメージです。

**宮脇:** 学生が先生の思い通りに動かなかったり、消極的な学生ばかりだったりすることはないのですか。

**後藤:** 消極的な学生ばかりということはありませんでした。もちろん、プラネタリウムの解説に適性はあります。例えばアナログ式のプラネタリウムの場合、レーザーポイントで星を指す必要がありますが、星を見つけることが難しかったり、解説するときに口がこもって明瞭に話すことができなかつたりする学生はいました。しかし、そういったときでも学生に「君はやめろ」とは絶対に言いませんでした。学生の可能性や、やる気を削ぐということは教育ではないと考えているので、じっと我慢してチャレンジさせました。その結果、今まで全員、上手にこなしてくれました。

また、今年と一昨年はコロナ禍でできなかったのですが、毎年沖繩合宿をしていました。みんなで沖繩に行くと結束感が違ってきます。そのため最初、温度差を感じるがあってもモチベーションが高まり、やる気のない学生や抜きたいという学生は全くいませんでした。

**宮脇:** 毎年おそろいのTシャツも作っていますね。

**後藤:** それは2009年からやっています。

最初の年は3年生がプラネタリウムの解説を行い、4年生が南山大学人類学博物館で企画展を行いました。実はプラネタリウムを借用するにはお金がかかります。2009年に開催した星空人類学では国立天文台から助成金をもらいましたが、毎年行うのは金銭的に難しいなと思い、2010年から人類研のイベントにしました。しかし、2010年、2011年、2012年はプラネタリウムをおこなっていません。その代わり、

私のゼミの企画として「人類学カフェ」を行いました。ロゴスセンターのホールにちょっとしたカフェを作り、食べものも扱うので昭和区の保健所に連絡して許可をもらい、コーヒーやお菓子をだしました。同時に展示もおこないたかったのですが、博物館の展示品の近くで食品を出すことは、資料保存上ご法度なのでできませんでした。

**宮脇:** 2010年の人類学フェス(★1)<sup>1)</sup>はどのような内容だったのでしょうか。

**後藤:** この年から人類文化学科のほかのゼミも加わるようになりました。吉田竹也先生、アントニサーミ・サガヤラージ先生、石原美奈子先生だったと思います。

私のゼミでは学生に、なるべく地元のを発掘しようという課題をだしました。何を調べたらよいか分からないという学生には、「例えば駅から大学へ歩く間だって視点を変えれば面白いものがたくさんあるから、それを見つけてなさい」と伝えました。考現学や建築探偵団の視点をもつように助言しました。そうすると学生は見つけてきました。そういったなか、ある学生は八事にある興正寺の門前町に伝わる蝶々づくりを見つけてきました。紙で蝶々を作り、それを竹につけて遊ぶものです。この蝶々づくりを伝えている方に講演もお願いしました。またある学生グループは、犬山市の人形作家から、からくりが分かる人形を借りてきて展示をしました。他にも学生が所属しているバレエ団に踊ってもらったり、紙芝居の活動をしている女性に紙芝居を読んでもらい、それにあわせて駄菓子を出したりしました。名古屋の駄菓子会社の社長さんだった方が、協力してくれました。

**宮脇:** 2010年は盛沢山だったのですね。

**後藤:** そうですね。いろいろなものが入っていて楽しいものが出てくるので「人類学のおもちゃ箱」というタイトルを付けました。

2011年は東日本大震災が起こった年なので、震災をテーマに人類学フェスを開催しました(★2)。このときから地震が発生した14:46にキャンドルサーピスを始めました。これは2011年以降も続けていました。

2012年は防災をテーマに開催しました(★3)。日本赤十字社による泥水でお米を炊くデモンストレーションがあったり、卒業生が手伝っているNGOに出店してもらい震災の被害を受けた石巻市の十三浜でとれたワカメを販売したり、そのワカメの味噌汁を作ったりしました。その時に仙台の被災農家を作ったご飯も一緒に食べています。その農家は海沿いにあり、震災の時に津波によって海水をかぶってしまい、ヘドロが堆積してしまいました。そこで琉球大学の先生が開発したEM菌を田んぼに入ると、そのヘドロが栄養になって、震災が起こったその年からお米を作ることができるようになりました。私はその農家からお米を購入しているのですが、そこに「防災をテーマにして日本赤十字社の人に、災害時にご飯を炊いてもらうイベントをおこなうので、お米を2kg買います」と電話したら、ひとめぼれ1kgときずなという震災後に作ったお米を1kgずつ送ってくれました。お金を払おうと思ったら、「そのような趣旨なら差上げます」と言ってくださいました。感動しましたね。

**宮脇:**2013年の人類学フェスはどうでしたか？

**後藤:**この年から星空人類学が復活しました(★4)。

当時大学の学長室にいた若林さんという方が2009年のプラネタリウムのことを知っており、小学生対象のイベントでプラネタリウムをやって欲しいと依頼してきました。実は4月の時点では前年と同様の人類学フェスをやろうと考えていました。それに向けてすでに授業を2・3回したところでしたが、急遽プラネタリウムをおこなうことになりました。学長室がプラネタリウムの借用費を出してくれたので、これをフェスにすることにしました。このときは他のゼミは時期が合わないということで参加せず、私のゼミ単独での行事になりました。

この年のプラネタリウムは近隣の子どもたちが親子連れで来てくれました。名古屋大学の先生親子も訪れていたようで、とても評価してもらえたみたいです。やはりプラネタリウムは面白いなと思い、科学研究費助成事業(以下、科研)を出すことにしました。すると、2014年から3年間科研を取ることができました。それ以来、3年・3年・3年で科研が通っており、

今年で9年目に入ります。最初はネオサイエンスとして、今はアンソロポリウムとして申請しています。

**宮脇:**アンソロポリウムという言葉も先生が作られたのですか？

**後藤:**そうです。私の造語です。

**宮脇:**2014年からは先生の科研費を使ってプラネタリウムを行ったのですね(★5)。

**後藤:**そうです。ただ、大きく変わった点は機械がアナログからデジタルになったことです。プラネタリウムの借用費は高額です。当時、プラネタリウムを五藤光学から借りるためには最低60万円くらい必要でした。科研は100万円くらいしかとっていないのでこれは大きな出費でした。また、五島光学の中で協力・仲介をしてくれている方から、「社内の営業が人類学的なプラネタリウムって意図が分からないって言っています」と聞かされてカチンとききました。そこで山梨の科学博物館にいた高橋真理子さんに相談すると、デジタルのプラネタリウムで活動している人がいると教えてもらい、ウィルシステムデザインという会社を紹介してもらいました。高橋さんは独立してエアドーム式プラネタリウムを使って、日本全国で活動をされている方です。しばしば病院などにも行かれています(一般社団法人「ほしつむぎの村」<https://hoshitsumugi.org/>)。

私はそれ以降、ずっとウィルシステムデザインとメディア・アイ・コーポレーションという個人で経営している会社に依頼し、デジタル式のプラネタリウムを使っています。二人ともともと五藤光学の技術畑の人で、独立してプラネタリウムを使って活動をしている方々です。

デジタル式のプラネタリウムを使うようになったのは2015年以降(★6)です。デジタル式はプログラミングするので、すべてパソコンのキーボードで操作でき、学生は解説を覚えるだけですみます。アナログ式は機械のつまみを操作することで星空を動かしたり星を指したりするのでトレーニングが必要で、それまでは五藤光学に合宿に行っていました。デジタル式に切り替えたことで自分のパソコン上で練習できるようになったため、2015年から合宿には行っていません。

**宮脇**：それ以外にデジタル式とアナログ式の違いはありますか？

**後藤**：デジタル式だと本や風景の画像を投影することができます。アナログ式は鉄の玉に穴があいていて、中に光源をおいて光を投影するだけなので、恒星を出すことができても不規則な惑星は出すことができない。太陽や月も動かすことができませんし、流れ星も当然できない。デジタル式はそういったことができます。ただデジタル式の原理は、パワーポイントの発表に使うような投影機の投影レンズを上に向けて、魚眼レンズでドーム内に投影するものです。つまりPCの画像を大きな凹型のドーム内に投影するので、「点」としての星を直接投影するアナログ式と比べて、どうしても星の点がぼやけてしまいます。しかし技術も進歩しており、今年私が科研費で購入した機械は4K画像を使い、かなりクリアに投影できるようになりました。

**宮脇**：その後も先生が研究休暇をとられた2018年以外、プラネタリウムは人類学フェスの目玉企画でした。2021年度が最後の実施となり、寂しい思いです。それでは、人類学フェス以外の所長時代のイベントのお話も聞きたいと思います。

**後藤**：私が所長になった時、景気づけに川田順三先生をお呼びしました（★7）。その後、東日本大震災がありましたね。私は東北出身なので、震災を経験した民俗学者を知っています。当時リアス・アーク美術館副館長だった川島秀一さんとみちの

く民俗学研究所代表だった岩崎真幸さんです。このお二人を呼んで、2011年に中部人類学談話会主催・人類学研究所共催で日本の人類学会のなかで一番はじめに震災関係のシンポジウムをおこないました（★8）。そして、2013年には『フタバから遠く離れて』という映画観賞会をおこなっており、この時も岩崎さんと地元のNPO（NPO法人自然環境応援団）を運営している上条大輔さんを呼んで、震災が発生してから2年、原発の後処理問題で地元では何が起きているのかをテーマにお話をしてもらいました（★9）。

その間、私は中部人類学談話会の会長を兼ねるようになり、談話会の活動と人類研の活動をできるだけ連携させるようにしました。

**宮脇**：講演会はいかがでしょう。

**後藤**：外国の著名な研究者を呼んで講演会を行いました。2010年にフランソワ・シゴさん<sup>2)</sup>、2011年にティム・インゴルドさん（★10）、2014年にはピエール・ルモニエさん（★11）をお呼びしています。もともと、フランソワ・シゴさんは神奈川大学、ティム・インゴルドさんは東京大学、ピエール・ルモニエさんは京都大学と、メジャーな大学が呼んでいます。それらの大学から、せっかく有名な先生が日本に来るので南山でも講演会を開催してほしいと言われ、呼ぶことができました。

**宮脇**：後藤先生がいたからですね。

**後藤**：個人的なつながりです。





**宮脇:**共同研究はいかがでしょうか。2010年以前は、学外の人も多くメンバーに加えて実施されていたようですが、後藤先生の時代は近隣の研究者を中心にゆるやかなメンバーシップが形成されていたように思います。

**後藤:**昔のことはよく分かりませんが、私に来る前、研究会はクローズドでおこなっていたと聞いたことがあります。

私の方針として、研究所は院生のたまり場にならなければいけないと思っていたので、研究会に出席したい人は誰でも参加できるかたちにしたつもりです。当時は現在の所長室で院生が読書会をしていました。

**宮脇:**私も所長室に学生を呼び込もうと、学科の学生さんたちに、沼澤資料の整理のためにアルバイトに来てもらい、この部屋で作業をしてもらっています。共同研究はメンバーシップを固定しなかったのですか？

**後藤:**メンバーシップは決めたのですが、院生や談話会に宣伝して興味のある人は誰でも参加できるような形にしました。

**宮脇:**共同研究会をやるうえで心掛けていたことや、どのようにしたらうまく回るのかその方法を知りたいです。

**後藤:**正直言うともあまり考えていませんでした。所長を引き受けてからグラウンドゼロからのスタートで、人類研がいろいろなことをやっているという景気づけをしなければいけませんでした。

共同研究も景気づけでやっているところがありました。当時中部人類学談話会の会長もやっていて、人類研でも談話会でもさまざまなことを企画するというようなことばかりをしていました。あまり意味を考えていませんでした。だから聞かれても立派なこととは言えない。これから立派にしていってください。

**宮脇:**ご自身の研究領域を広げる天文学と人類学に関するシンポジウムも4回実施していますね。

**後藤:**国立天文台に文化系的なことに興味を持っている方がいました。2009年世界天文年時に開催された「東アジアの星」シンポジウムでご一緒した海部宣男先生(当時、国立天文台)です。海部先

生は天文学者ですが和歌のなかの天文を調べたりするのがお好きな方で、先生のお弟子さんの吉田二美さん(当時、国立天文台国際連携室)から天文学と人類学を融合させる研究会を国立天文台でやろうと誘われました。しかし天文台のほうから、五藤光学の時と同じように「人類学とコラボ?天文学的に意義が分からない」というような意見が出て、そのアイデアがつぶされてしまいました。そこで「じゃあ人類研でやるよ」ということになりました。最初の講演会には海部先生に来てもらいました。

**宮脇:**2015年の天文学と人類学の融合が最初ですね(★12)。

**後藤:**1年目は海部先生のほかに考古学者で坂井正人さん(山形大学)というビッグネームもお呼びしました。コメンテーターには天文学者の吉田二美さんに来てもらいました。2年目(★13)には考古学サイドで佐藤吉文さん(当時、南山大学人類学研究所)、天文学サイドは谷川清隆先生(国立天文台)をお呼びしました。3年目(★14)には戸田美佳子さん(当時、国立民族学博物館)など若手の研究者をお呼びしました。4年目は人類研ではシンポジウムはおこなっておらず、私の提案で国立天文台で研究会をしました。岡田浩樹さん(神戸大学)の国立民族学博物館での共同研究「宇宙開発に関する文化人類学からの接近」も兼ねて国立天文台に講演会の話を持っていきました。この時は地球外生命体をテーマに大村敬一さん(当時、大阪大学)も講演をおこなっています。この講演会には研究所は関わっていないのですが、私の中ではつながっている出来事です。

**宮脇:**去年はオンライン<sup>3)</sup>で国際シンポジウムを実施しましたね。

続いて国際化推進事業のことをお聞かせください。人類研では2015年から第3期、2018年から第4期の国際化推進事業に採択され、アジア圏の研究者とのネットワークを構築し、国際シンポジウムなどをおこなってきました。

**後藤:**当時、研究所を羽振りよくするためにさまざまなことを考えました。国際化推進事業は大学独自の事業で3年ごとに募集されます。第2期に社会倫

理研究所（以下、社倫研）の国際化推進事業が採択されており、これを使って研究員を雇用できることを知りました。そこで一人でも人を増やそうと思い、申請を決めました。

当時、アジアで震災が起きていました。東日本大震災前にはスマトラ大震災があり、津波が押し寄せました。アジアは火山があつたり津波があつたりで同じような災害があるので、災害における人類学の役割みたいなので国際シンポジウムができないだろうかと考えました。震災に関心があつたことも一つですが、人類研というのはもともとアジアを対象にしてきました。今はアフリカや南米の研究をされている先生方もいますが、当時はクネヒト・ペトロ先生がやっていた *Asian Folklore Studies* という学術誌の意図も反映されていたのだと思います。あともうひとつ、本音を言わせてもらおうと、もう一人くらいなんとか雇いたいと思っていました。

**宮脇：**所長時代初期には学部のお仕事もあるのに、人類研のほうでも多くの仕事をされていましたね。

**後藤：**そうですね。中部人類学談話会の会長もやっていたし、沖縄の博物館の仕事もあつたので忙しかつたですね。やるからには景気づけなければいけないと思つていろんなことを始めました。

**宮脇：**先生は『年報人類学研究』や『人類学研究所研究論集』も創刊させましたね。

**後藤：**そうですね。でも普通ではないですか？研究所で何かするのであれば、例えば国立民族学博物館や東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所とかとは規模が違いますが、同じように研究年報や論集を出すのが常道でしょう。あとは講演会、研究会、そういうものしかないと思います。人類学フェスは変わった試みだとは思いますが、普通のことをやっただけです。

**宮脇：**今後の人類研に期待することはどのようなことでしょうか。

**後藤：**私が仕事を始めたときに比べれば夢のような、といいますが、今はいろいろなことが軌道に乗って動き出しているので、とても望ましい方向に行つているように思います。最初はグラウンドゼロみたいな感じがあつたので。はじめは吉田先生、石原先生、サガヤ

ラージ先生、渡部先生、あとリースラント・アンドレアス先生だつたかな、みなさん協力してくれたのでやることができたと思います。

2022年2月3日、人類学研究所所長室にて

文章構成：古澤夏子（編集事務）

註

- 1) 次ページ「表 活動報告（2010年度～2017年度）」に対応しています。
- 2) 南山大学人類学博物館シンポジウム「ニューギニアの物質文化」（2010年12月14日開催）
- 3) 第3回公開シンポジウム「Symposium on Indigenous Calendars used in Asia (West-,South-,Southeast-,East-) and Oceania (The Integration of Astronomy and Anthropology Symposium No.4)」（2021年3月15日開催）

表 活動報告 (2010 年度～ 2017 年度)

	日時	活動名	企画者*
2010年度	6月23日	公開講演会 「新しいヒトの学を目指して」★7	
	7月27日	公開講演会 「Diasporic Tamil's Negotiation of Identity through Tamil Cinema with reference to South Africa and Malaysia」	アントニサーミ・サガヤラージ
	11月21日	人類学フェスティバル2010「人類学のおもちゃ箱」★1	
2011年度	6月27日	講演 「アンデスにおけるアーバンゼーション（都市化）についての概念的挑戦」	渡部 森哉
	7月23日	公開シンポジウム 「災害における人類学の役割――東日本大震災の教訓」★8	
	11月19日	人類学フェスティバル2011「となりの人類学」★2	
	2月29日	公開講演会 「生に向かう人類学」（ティム・インゴルド連続講演会『生きていること』から始める第1回）★10	
2012年度	7月27日	公開講演会 「自殺の人類学」（次期共同研究プレフォーラム1）	
	10月5日	ワークショップ 「ワヤンベベルと現代バリ芸術」	吉田 竹也
	11月18日	人類学フェスティバル2012「むすぶ人類学」★3	
	12月15日	公開講演会 「人類学者はなぜそこにいたのか」（次期共同研究プレフォーラム2）	
	2月19日	公開シンポジウム 「古代アンデスにおける国家の成立と展開」	渡部 森哉
	3月16日	公開講演会 「Singing about Disaster: How Oral Tradition Serves or does not Serve Goven, emtalities」（次期共同研究プレフォーラム3）	
2013年度	6月22日	講演会 「古代アンデス社会の危機」	渡部 森哉
	8月4日	人類学フェスティバル2013「星空人類学」★4	
	10月19日	映画鑑賞会 「フタバから遠く離れて」★9	
	11月16日	公開講演会 「北朝鮮社会の人類学的考察」	渡部 森哉
	11月29日	講演会 「モノをして語らせる：モノに残された痕跡から真実を探る-レプリカ法によるアプローチ」	渡部 森哉
	3月25日	第3回三大学シンポジウム 「オセアニアの物質文化・民族造形――通称今泉コレクションを中心に」	
2014年度	4月12日	（共催）中部地区研究懇談会（中部人類学談話会）第222回例会 「劣悪なガヴァンスの人類学へ向けて」	
	7月5日	5大学研究所連合公開研究会 「民具と民芸」	濱田 琢司・後藤 明
	12月19日	公開講演会 「災害と克服」	渡部 森哉
	11月16日	2014年度人類学フェスティバル★5	
	1月25日	（協賛）公開シンポジウム 「海人の考古学：東南アジアからオセアニアへ」	
	1月31日	セミナー「Nanzan ZAIRAICHI Seminar」&ワークショップ「Reflecting Local Knowledge to Global Context」★11	
	2月28日、3月1日	公開シンポジウム 「琉球列島最古の航海者を探る」	
3月12日	公開研究会 「人類学研究所の新展開を考える」		
2015年度	6月4日	"PROTRACTED CAMP LIFE OF SRI LANKAN REFUGEES IN TAMIL NADU - INDIA: A CULTURAL PERSPECTIVE"（インドタミル・ナドゥ州におけるスリランカ難民の長引くキャンプ生活：文化的観点から）	アントニサーミ・サガヤラージ
	7月4日	公開シンポジウム 「建築人類学の行方」	藏本 龍介
	10月24日	公開シンポジウム 「台風に対応する社会と文化―沖縄・奄美・台湾の比較研究―」	藤川 美代子
	11月22日	2015年度人類学フェスティバル★6	
	12月26日、27日	（共催）東アジア人類学研究会 「宿研究会」	宮脇 千絵
	1月24日	《国際化推進事業》公開シンポジウム 「手しごとと復興」	宮脇 千絵
	2月19日	《国際化推進事業》公開講演会 「災害ミュージアム×防災地理学」	宮脇 千絵
	2月27日	公開講演会 「Classification as a Memory Practice―The Case of Biodiversity」	藏本 龍介
	2月28日	公開講演会 「天文学と人類学の融合―空とヒトをつなぐもの」★12	
	3月6日	映画鑑賞会と公開講演会 「ソナム」	藏本 龍介・藤川 美代子
2016年度	5月26日	（共催）第12回太平洋芸術祭の太平洋カーヌーサミット	
	6月18日	公開講演会 「新大陸考古学の展望―受賞記念講演会―」	藏本 龍介・藤川 美代子
	6月25日	第3回「南アジアを識る」セミナー実施	アントニサーミ・サガヤラージ
	7月10日	映画上映会とトークセッション「抱く(HUG)」	藏本 龍介・藤川 美代子
	10月2日	《国際化推進事業》国際シンポジウム 「Disaster and the Role of the Anthropologist: Efforts in Asian Countries」	宮脇 千絵
	11月20日	「人類学フェスティバル2016」	
	12月3日	公開シンポジウム 「『宗教組織の経営』についての文化人類学的研究」	藏本 龍介
	12月17日	映画上映会と解説 「カーンチワラム：サリーを織る人」	アントニサーミ・サガヤラージ
1月29日	公開講演会 「Belonging to a Japanese religion in Africa」	藏本 龍介	
2月18日	公開シンポジウム 「水上と陸上に生きる：アジアの船上生活者が経験した「陸上がり」	藤川 美代子	
3月5日	公開シンポジウム 「人はいかにして時を知り、季節を憂でるか―天文学と人類学の協同アプローチ―」★13		
2017年度	7月15日	（共催）国立民族学博物館共同研究 「世界のピースをめぐる人類学的研究」	
	10月1日	《国際化推進事業》公開講演会 「東日本大震災を語り継ぐ―宮城県被災地から―」	高村 美也子
	10月14日	映画上映会とトークセッション 「ラモツォの亡命ノート」	宮脇 千絵
	10月22日	「人類学フェスティバル2017」	
	11月26日	（共催）民族芸術学会第147回研究例会	宮脇 千絵
	12月2日	公開シンポジウム 「移動と流行：現代中国のコンタクト・ゾーン」	宮脇 千絵
	3月3日	公開シンポジウム 「不確実な世界に住まう：遊動/定住の狭間に生きる身体」（2017年度公募シンポジウム）	藤川 美代子
3月18日	公開シンポジウム 「天文学と人類学の融合 第3回：それぞれの大地、それぞれの宇宙」★14		

\*後藤明以外の企画者



## 後藤明先生退職記念

### アンソロポリウムの実践について

後藤明 (人類学研究所・人文学部人類文化学科)

#### はじめに

アンソロポリウムとは、プラネタリウムの中で天文現象を投影して行われる人類学的な教育イベントである(写真1)。

近年このような天文学と社会との関係を探る分野は文化天文学(cultural astronomy)、あるいは文化の中の天文学(astronomy in culture)という用語が国際学会では定着しつつある。

すなわち世界各地で、人類はその土地の自然や生活に基づいて天文現象を解釈している、逆に天文現象を観察することで、方位観や時間(暦)、またコスモロジー、さらにコスモビジョンを形成している。コスモビジョンとは宇宙の動きに社会の動態を重ね合わせ、社会構造や権力の基盤を正当化するために形成されるものである。

さてそのような学問的な背景は別項に譲り(後藤 2014a; 2014b; 2022, 印刷中)、本稿ではアンソロポリウムを実践するプログラムを作るプロセス、そのノウハウを記していく。

#### ラフドラフトの作成

まず、いつ、どこで実施するかを決める必要がある。要するに「今、ここから」始め、一晩かかって世界各地の星を見たり、あるいは過去にさかのぼって天体を見たりして(=日向市で実施した「プラネタリウムはタイムマシン」プログラム)、最後に「明日の朝、ここに戻ってきました」で終わるようにしている。しかしこれは私のこだわりであって、そうでなければできないというわけではない。たとえばスタートとなる星空は500年前のハワイでも100年後のアラスカで



写真1 エアドーム式のプラネタリウム。手前の装置はエアを送る送風機(2021年11月喜界島にて)。

も天文ソフト的には構わない。

たとえばスタートの場所を南山のキャンパスと固定し、何時にどの星について語るかという大雑把な流れを決めるのである。まずその季節にその場所(緯度)で夜見える星のシミュレーションをPC用のソフトで行う。季節によって時間は異なるが夕方、日が沈む午後5時から6時ごろに設定し、見える星を確認する。そのあと「満天の星」が見える夜8時ごろまで星空を動かし、上り下りする星を確認する。恒星なら季節さえきまれば予想はつくが、惑星や月に関しては年によって異なるので天文ソフトでシミュレーションして確認する。

さらに星空を固定して複数の星座へ言及する場合もあるし、時間をたとえば8時から10時まで動かしたあと言及する星座を決めることもある。小さなエアドーム内の場合、地平線近くの星座は見にくいので、時間を動かして昇ってきたときに言及するのが普通である。このような作業を経て、まずラフシナリオを作る(図1)。

```

2020 星空人類学シナリオ・ダイジェスト

<オープニング>
2020年1月9日
名古屋、南山大学グリーン・エリア
夕方から日が沈み、夜9時頃の星空

<解説者1>
北天に見えているカシオペア、アンドロメダ、ペルセウス、ペガサス、くじら座
などに関するギリシャ神話の解説

東天から天頂に見えている牡牛座とプレアデス（ズーム）、オリオン座、双子座、
オオイヌ座とシリウスなどのギリシア神話の解説

牡牛座、オリオン座に相当する日本神話の解説

火星（ズーム）に関する日本古典の話の解説

<解説者2>
緯度を北上させて、北海道稚内まで移動。
アイヌ民族の星座の解説。カシオペア、北斗七星、双子座、オリオン、プレアデ
ス、シリウス、など。

緯度を南下させて、沖縄、八重山の星を解説。ケンタウルス、南十字。

<解説者3>
さらに緯度を南下させ、南米、ポリネシアの星を解説。
マウイの釣り針座（＝サソリ座）。
星が垂直に上り下りする状態を解説、キリバスの航海石の解説。

さらに緯度を南下させ、南米、マチュピチュの星空。
インカの星を解説。
天の川の暗黒部分にリヤマ座を見る神話を解説。
南十字から真南を見る方法を解説。

<エンディング>
日本、名古屋の星空、1月10日明け方の星空
全天に全星座の投影
流れ星

```

```

# 2022 年南山大学人類学フェスティバル上映用スクリプト Rev.5
# 2022nanzan5.sts
#
# Copyright(C)2021-2022 T.Takao@Will System Design
#
*****

# 日周運動：17時から19時まで30秒
timerate rate 240
wait duration 30
timerate rate 0
flag landscape off
wait duration 1
script action pause

# カシオペア座（星座線）
select constellation Cas
flag constellation_drawing on
wait duration 1
script action pause

# 北極星ポインタ
flag constellation_drawing off
wait duration 1
deselect
select hp 11767 pointer on
wait duration 1
script action pause

deselect
script action pause

*****

# 南山大学に移動（10秒）
sky_culture path japanese t3v1 action load
date utc 2022-01-23T20:00:00
moveto lat 35.23 lon 139.66 duration 10
wait duration 10
script action pause

```

図1 2020 星空人類学 in Nanzan 用ラフ・ドラフト

### スクリプトの作成

次にこのラフ・ドラフトを専門家に渡して、投影のためのプログラム、正確にはスクリプトを書いてもらう。そして専門家からはスクリプト（図2）が戻ってくる。スクリプトには投影に使う天体図やこちらから予めお渡ししてある風景や遺跡の画像が添付で戻ってくる。

このスクリプトはプラネタリウム投影用に完了したフリーのソフト nightshade 用である。これは世界の考古天文学者のスタンダードとなっている stellarium をプラネタリウム投影用に改良したソフトである。スクリプトは、ある程度常識で推測できる設定やコマンドからなりたつ。ただしスクリプトのこの部分は星を動かす部分だけであり、スクリプト冒頭には投影地点の場所や投影で使う画像の宣言など、たくさんの情報の設定が書かれている。

そしてこのようなスクリプトと同時に星座運行表（図3）が来るので、星座運行表で見ながら、そのスクリプトをPCで実行しながら、微調整が始まる。たとえば実際にやってみて、星座を説明する順序を変えたり、ある星座を説明するためのタイミングを30

```

# 地球ズーム（10秒）
image name earth alpha 1.0 duration 2
image name earth scale 50 duration 8
wait duration 10
script action pause

image name earth alpha 0 duration 2
wait duration 2
script action pause

# 風景画5枚
image name image1 alpha 1.0 duration 2
wait duration 2
image name image2 alpha 1.0 duration 2
wait duration 2

*****

# 流れ星
flag atmosphere on
flag landscape on
wait duration 1
image name shooting1 altitude 30 duration 3
wait duration 1
image name shooting1 alpha 1 duration 1
wait duration 1
image name shooting1 alpha 0 duration 1
wait duration 1

*****

# 午前9時まで日周運動60秒
timerate rate 240
wait duration 60
timerate rate 0
script action pause

# 初期設定に戻る
configuration action load
wait duration 1

```

図2 2020 星空人類学 in Nanzan 用スクリプト

分とか1時間とか早めたり遅くしたりする、という微調整である。

星座線は西欧星座なら星座線と星座絵はデフォルトで入っているが、アイヌとかポリネシアなどの星座線・星座絵は入っていない。それを投影する場合、こちらが文献からスキャンした星座線の画像をお渡しして、星座に合わせるように調整してもらう。





解説シナリオ

チェック1 (開始時刻の星空とチャート): 投影位置やピント確認・調整  
↓  
チェック2 (開始時刻の地上風景): 映像色合い確認・調整

ブルーバック: ここで客入れ  
↓ 『皆さん必ずスマホや携帯の電源を切ってください。これからドーム内は暗くなります。もし気分が悪くなられたら、私たちに知らせてください。』

2021年1月9日16時 大学の風景  
↓ 『さて風景が見えてきました。どこかわかりますか? これは私たちの学ぶ南山大学のグリーンエリアで実際に撮影したパノラマ画像です。』

東西南北の方位を出す。(PCで見れば上が北、左が右、下が南、右が西)  
↓ 『こちらが北で、こちらが東が、西、南、です。地図では東西が逆になると思いますが、この画面を仰向けに寝っ転がってみている想像してみてください。タブレットで見ている人は寝て、タブレットを上にしてみてください。』

午後9時まで1分間の日周運動  
↓ 『地平線近くの星座紹介が多いので、20時の空になったところで地上風景を消しています。』  
↓ 『さてこれが今日、今日、1月9日の夜9時ころ、名古屋から見える星空です。東京とか名古屋だと明かりに隠られてこんなに星は見えませんが、本当はこんなに頭の上には星が輝いているんですよ。頭上に天の川が見えますね。』

カシオペア座の星座線を投影  
↓ 『この星の星座はわかりますか? そうですカシオペア座ですね。このカシオペアって何の名前が知っていますか?』  
↓ カシオペア座の星座線を投影  
↓ アンドロメダ座の星座線と星座線を投影  
↓ ペルセウス座の星座線と星座線を投影  
↓ ベガス座の星座線と星座線を投影  
↓ ペルセウス座・アンドロメダ座・ベガス座(線・絵)投影

「これらの星座はギリシア神話で有名です。先程見たカシオペア座は女王で、アンドロメダはその美しい娘。しかし娘の美貌をあまり自慢しすぎて神々の怒りを買って、アンドロメダは怪物の北け鮫の生け贖いされることになってしまいました。しかしアンドロメダが人身御供になる寸前、天馬ベガスに乗った英雄ペルセウスが来たという神話です。しかしこのプラネタリウムではこのように知られた西歐の星座ではなく、違う世界の神話の話を紹介していきます。」  
↓  
\*\*\*\*\* (中略) \*\*\*\*\*  
↓  
「さてこのようなお話はギリシア神話ですが、世界の人々は、同じ星の並びを異なった見方をして、それぞれの土地の生活や自然を結びつけた物語を投影しているのです。では今見たギリシアや西洋のお話ではなく、この人類学的プラネタリウム、アンソロポリウムでは日本の神話や北海道のアイヌの方々の星座、沖縄さらにポリネシアや南米インカの方々の星座を紹介していきます。」  
↓  
\*\*\*\*\* (中略) \*\*\*\*\*  
↓  
サソリ座をスポット  
↓  
「さて、ここに、アルファベットのSに似た星の並びがあります。誕生日の星で知られている、さそり座です。サソリ座はメソポタミア文明に起源があります。あの辺の砂漠ではサソリが多いのでそう名付けたのでしょう。」  
↓  
「でも皆さんはこの星座、何見えますか。そうですね、ここポリネシアにはこの星座にちなんで「マウイの釣針」という神話があります。」  
↓  
神話の解説 <課題>ここにマウイの釣針の神話を挿入  
↓  
「鳥を吊り上げるなんて面白い話ですね。実は日本の瀬戸内海の漁師の人もサソリ座のことを釣針、つまり釣針だと伝える所もあります。ポリネシアと同じように見ていたんですね。海の民の共通性でしょうか。」  
↓  
\*\*\*\*\* (中略) \*\*\*\*\*  
↓  
「さてそろそろ星空の日本一周そして世界一周は終わりにしましょう。では明日、1月10日、名古屋の明け方の星空に戻しましょう。」  
↓  
回転して、名古屋の星空に戻す。  
↓  
88星座の星座線と星座線を投影

↓  
「私たちの頭の上にはこんなにたくさんの星があるのですよ。」  
↓  
88星座の星座線と星座線を消去  
↓  
地球の写真ズーム投影  
↓  
「この美しい地球からきれいな星空を見るためには、きれいな空気が必要です。また必要のない明かりは邪魔になります。光害、つまり光の害も深刻な問題となっています。今日この機会に環境を守るために、毎日の生活を見直してみよう。」  
↓  
\*\*\*\*\* (中略) \*\*\*\*\*  
↓  
「明るくなって、またキャンパスの風景に戻ってきましたね。」  
↓  
午前8時まで1分間の日周運動、南山大学キャンパスの360度画像を地平線に投影  
↓ 日周運動が終わったところで上映終了・初期設定に戻る。

それが完成すると、次に解説担当の学生は担当部分で nightshade を K (キュー用) キーで場面場面を動かしながら、解説の声を乗せていく(録音)作業を行った。解説を間違ったり、学生自身が自分の語りに満足できないこともあるため、複数回、夜遅い時間まで声乗せを行った。

さてアナログであれデジタルであれ、エアドーム内で対面で行うことしか考えていなかった。しかしコロナの副産物であるが、2020年、2021年には新たな可能な方式を試みた。それを列記する。

(1) 従来の対面式: エアドームの中にプロジェクターで星空を投影する。解説は生解説で、BGMは iPod などに入れておき、場面場面で解説者あるいは補助者がクリックして進めていく。三線などの生演奏を入れるのも可能。2021年11月は、喜界島で実施。かつては南山大学の星空人類学、日向市の「プラネタリウムはタイムマシン」、北海道標津町の「北の大地の星空」などもこの型式で実施した。

(2) オンライン型: 星空動画、BGM、解説もすべて動画化しておき、ZOOM などを通してオンライン配信する。ただし PC 上の平面画像になるため、臨場感は薄れる。仰向けに寝て iPad などを掲げて、下から見ると、すこし星空感が体験できるだろう。nightshade ではマウスが表示できないので (a). 一度映像化したもの(星空+解説音声+BGM)を映像再生ソフトで再生しながら、マウスを動かしたり星座を囲んだりする映像を bandicam で再び映像化する(完全映像化)、あるいは (b). 本番の日、ZOOM で本番の映像を流すときに、私が解説映像の上でマウスを動かす(映像+マウスだけマニュアル)のどちらかの方式をとった。2021年1月の人類学フェスティバルは (a). 方式。2022年1月の人類学フェスティバルは (b). 方式をとった。

(3) ハイブリッド式: 星空動画、BGM、解説もすべて動画化しておき、ドーム内に投影する。ただしドーム内の客入れ、また映像を流すまえの注意や細く解説をするために担当者はドーム内に入る必要がある。この方式は 2021年12月、札幌ピリカコタンで実施。

図4 2020 星空人類学シナリオ (抄)

## おわりに

2021年度、喜界島ではエアドームの中に実際に映像を投影し、観客に直接お見せすることができた。一方、2021年度はOIST（沖縄科学技術大学院大学）で沖縄の星を中心に沖縄出身の解説者で実施予定であったが、オミクロン株の猛威があり、オンライン実施も考えたが、大学スタッフ自身が自宅ワークとなったために物理的に不可能となり、中止した。2022年度は何らかの形で実施したい。また昨年同様喜界島、また北海道のアイヌ民族の多い村落で、アイヌ語の解説などを交えたイベント実施の相談もあるので、実施することを目標のひとつとする。

さらに2021年度はサイエンスコミュニケーションを専攻ないし副専攻する日本各地の大学院生が喜界島および札幌のイベントでは協力をしてくれた。今年度はさらに最初のラフ・シナリオ作りから協力してもらい、申請者が過去10年培ってきたノウハウを伝授し、さらなる発展を目指したい。

### <付記>アナログ式の時代とデジタル式の利点

ドーム内で星を示すためには、アナログ式投影機の場合は解説者がレーザーポインタで星座を示していた。しかしデジタル式投影の場合は、場面場面でプログラムにそって星座がポイントされるので解説者は解説に集中できる。またデジタル式だと星をズームできるので「宇宙旅行」が疑似体験できる。ズームする場合、恒星をズームしても、ただ明るい点が大きくなるだけで面白くない。一方、ズームして効果的なのは「面的」すなわち、プレアデスのような星団、あるいはアンドロメダのような星雲である。

惑星もズームの効果がある。ただし水星、金星、海王星や天王星はただ点が大きくなるだけなので、ズームすると模様が見えるような惑星、つまり月、火星、木星、さらに輪が見える土星を見せるのが効果的だ。ただ、惑星は場所と時間を特定しても、その年は見えない（昇らない）可能性もあるのであらかじめ天文ソフトで確認しておく。

アナログの時代は解説者が自分で投影機械のつまみで星空を動かすので、スクリプト制作という段階は存在しない。そしてシナリオが完成したら、実際の

エアドーム内での実習となる。アナログ時代は解説希望の学生と一泊二日で東京府中の五藤光学で実習を行ったものである。ドーム内で実際に解説者が一人ひとり、投影機をつまみを動かしながら解説の練習をした。ドームの中は満天の星が見える。そのためかえって解説すべき星座が見つからない場合もある。見つけないのが苦手な学生もいた。一度見つからないとパニックになる場合もあった（写真2）。

また星座絵はメガホン型の投影機を天井に向けて投影するのだが、解説者は手一杯なので、もうひとりの解説者が補助をする。補助者はBGMも担当した。最初はレコーダーにCDを入れてBGMを流すという極めて素朴な方法でやっていたが、その後学生の提案でiPodやスマホに音源を解説の順に入れ、必要に応じてクリックすればいいということになった。しかし解説者と補助者と二人一組で解説を行うのを基本とした。補助者は次の解説を担当する学生にする。そうすると自分の番の予行演習になるからだ。

デジタル式になった今日、このアナログ時代の苦勞は今や伝説となったといえる。



写真2 五藤光学製のアナログ式投影機。内部から光源で星を投影する。手前のつまみを回して場所（赤緯）や時間（赤経）、あるいは明るさなどを調節する。

### 参考文献

後藤明

2014 a 「天文と人類学」『文化人類学』97 (2): 164-178.

2014 b 「外伝 天文と人類学」『南山考人』43: 35-48.

2022 「研究の歩み」大西秀之編『モノ・コト・コトバの人類史 - 総合人類学の探究 -』、雄山閣 pp.359-374.

印刷中 「アンソロポロウム: その目指すもの」『月刊海洋・特集「サング礁科学研究-多分野異文化融合の拠点へ」』。

## 人類学フェスティバル 2021 ★オンライン

宮脇千絵 (人類学研究所)

2022年1月23日に開催した毎年恒例の人類学フェスティバル。昨年度に引き続き、2021年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響によりオンラインでの実施であった。学生の発表はますます活況を帯びた。一方で、名物企画であった後藤ゼミによる発表は、後藤明先生のご退職にともない最後の実施となった。

オンラインでの実施2年目となった今年度は、後藤明ゼミによる「アンソロポリウム 2021 in Nanzan」と学部学生によるポスター発表とディスカッションというふたつの企画をおこなった。

「アンソロポリウム 2021 in Nanzan」では、後藤ゼミに所属する学生がアンソロポリウム上映、展示解説「人々の生活に息づく星空の世界」、ワークショップ「My プラネタリウムを作ろう!」の3グループに分かれ、動画作成と配信をおこなった。特に、南山大学の空から出発しアラスカ、タヒチ、マチュピチュの星空を映し出し、美しいナレーションとともに解説したアンソロポリウム上映は、オンライン上で世界の星空旅行を体験できるものであった。1時間にまとめられた動画を、約80名(2回実施ののべ人数)の方が視聴した。

学部学生によるポスター発表では、昨年度に引き続いて参加の人文学部人類文化学科(上峯篤史ゼミ、藤川美代子ゼミ、宮沢千尋ゼミ)、外国語学部アジア学科(張玉玲ゼミ)、中京大学現代社会学部(岡部真由美ゼミ)に加え、名古屋大学文学部(東賢太郎ゼミ)からも4年生が参加してくれた。また愛知淑徳大学交流文化学部(二文字屋脩ゼミ)の2年生も、来年の参加を目指してディスカッションに参加してくれた。

学生たちが工夫をこらして作成したポスターは、

冬休み前にウェブサイトへアップされ、各自それに基づいて質問を考えてきてくれた。当日は、司会や議事録も学生が担当し、zoomの画面越しとはいえ、大学・学部を越えて活発なディスカッションが展開された。今年は学生46名が発表し、教員7名がホスト役を務めた。

オンライン実施も2年目となり、手順やzoomにも多少慣れ、無事に終えることができた。参加してくれた学生たちからは、思いもよらない研究テーマや着眼点との出会いやディスカッションの深まりを感じたり、他大学の学生に刺激を受けたりしたといった前向きな感想が寄せられている。この人類学フェスティバルが名古屋圏の学生・教員同士のネットワーク構築のプラットフォームとなることを願う。

一方で、2010年から人類学フェスティバルをはじめた後藤先生のゼミにとっては、最後のアンソロポリウム(プラネタリウム)企画となった。旧ロゴセンターで開催していたころには、近隣に住む方々にも好評であり、後藤ゼミでプラネタリウムをやりたくて入学した学生もいたと聞く。人類学という学問の楽しさを大学内や研究者だけに留めず、一般にも広く還元していた名物企画が終わりを迎えることは、人類研にとっても心細い思いである。人類学フェスティバルは今後も継続する予定なので、そのコンセプトを引き継いでいきたいと思う。



## 参加学生によるコメント

### 後藤ゼミ（人文学部人類文化学科）

私はワークショップ班を担当し、手作りプラネタリウムを紹介した。ワークショップ班は、解説班や展示班が伝えた内容について、視聴者が改めて理解し実感するような体験を提供することを心掛けた。第一に重視したのは、視聴者がワークショップ班の発表を見て、自分でもやってみようと思えるような内容にすること、視聴者が作業を行う際のハードルが高くないということである。オンライン開催でこちら側が材料や道具を用意できないため、図面さえあれば特殊なものを用意する必要のないペーパークラフトを紹介することに決定した。作業自体も、それほど複雑ではなく説明を一度見ただけでも失敗せずに作成できるようなものにした。

またそれが興味をひくものでなくては実行に移してもらうことができないので、正十二面体のプラネタリウムを紹介することにした。紙から比較的複雑な立体物をつくることは十分興味を引くだろうと思われ、また光を当てて室内で星を見ることができるといった内容も、作業の容易さに反して感動が大きいだろう。

配布資料として用意した星座については、国際天文学連合のウェブサイトにあるものを利用して作成した。資料を作成するにあたって、星座を構成する星をすべて記入すると肉眼で見える印象と異なるものになってしまうと考え、3等星または4等星以上の明るさをもつ星を中心に選んで記入した。つづいて、日本におけるオリオン座の様々な見方を紹介する部分を作成するにあたって、いくつかの資料を参考にした。

他のゼミ生と協力して一つのものを作り上げることは、得難い経験であった。3人の知恵を合わせ、分担して出来上がった動画は、自分ひとりの力では作り出せないようなものとなった。

（深谷怜美）

私が「アンソロポリウム」について知ったのは、高校2年生の時に参加したオープンキャンパスでの後藤先生の模擬授業でした。そのときは「学生が運営するプラネタリウム」がどのようなものなのかというイメージが湧きませんでした。星も神話も好きな私にとっては非常に興味深い取り組みでした。それから数年経ち、新型

コロナウイルスの影響で多少運営の形は変わってもアンソロポリウムに携わることができたことを大変嬉しく思います。取り上げる星や神話を探してプログラムを一から考えたり、録音した音声に音楽をつけたりと細部にまでこだわって楽しく作ることができたのは、いい先生やゼミ生に出会えたおかげです。最後になりましたが、この度アンソロポリウム 2022 の解説を担当させていただくことができ、4年越しに夢を叶えることができたことは私にとって一生ものの思い出となりました。このような貴重な体験をさせていただくことができたことに感謝するとともに、多くの人にアンソロポリウムの素晴らしさをお伝えできていることを切に願います。

（奥山映）

### 上峯ゼミ（人文学部人類文化学科）

上峯研究室では考古学的手法を用いて、岐阜県下呂市湯ヶ峰を研究している。一方で、石器石材原産地としての湯ヶ峰や、その周辺の石器時代遺跡が、下呂市特有の観光資源として利用されていない現状があった。学術的な成果を下呂市振興に還元するため、石器研究グループとして南山チャレンジプロジェクトの後援を受け、今年度は遺跡の周知活動に取り組んだ。現地での市民参加型のハイキング・イベントの実施や、遺跡解説冊子の製作を通して、地元住民を中心に、湯ヶ峰の石器時代遺跡群の文化資源としての知名度を高めることができた。

発表の場では、学生の卒業論文の見立てを題材にしたポスターを多く拝見した。それぞれのポスターは、問いや研究方法が論理的にまとめられており、どれも見応えがあった。質疑応答では、熱い議論が交わされる場面に何度か立ち会った。皆が熱心に研究に取り組む姿を見て、私も研究に対して俄然やる気が湧いた。

（村井咲月）

私たち上峯ゼミ3期生は、2021年の夏に実施した天神山遺跡（愛知県南知多町）の発掘調査の成果と、そこで得られた土器片の編年についてポスター発表した。天神山遺跡は縄文時代早期後半から前期初頭の遺跡

である。東海地方の縄文時代の遺跡の中でも、土器の変遷や年代把握の基準となる重要な遺跡で、発掘調査により東海地方の縄文土器の年代、型式や編年の理解をより確かなものにしてという目的から調査を実施した。発掘調査を行う際には、遺物の有無やそれが発見された場所、堆積物の変化といった、あらゆる情報を漏らさないように注意して作業を行う必要がある。また、出土した土器片の文様の変化や先行研究を参考に、入海式土器から塩谷式土器までの編年を作り、炭素十四年代法で明らかとなっている絶対年代を対応させた。これにより、知多半島周辺における縄文時代早期後半から前期の初頭にかけての土器の変化を確かめることができた。

ポスター発表の質疑応答の際、考古学専攻ではない学生の疑問に答えることにより、考古学や発掘調査における本質的な意義や目的を見つめ直すことができた。また、他のゼミの学生のポスター発表を聞くことができ、新たな視点から物事を考えることができた。

(村田桃子)

## 張ゼミ (外国語学部アジア学科)

今回の人類学フェスティバルでは、多くの貴重なアドバイス及び質問をいただくことができました。自分では考えもしなかった視点での質問や、参考文献についてのアドバイス、深掘りするべきところの指摘など、多くのご意見を頂き、今後卒業論文を仕上げていく上で貴重な経験になりました。そして何より、オンライン上ではありますが、多くの、自分よりも深く物事を思考している方々、自分よりも意識の高い方々と交流することで、大きな刺激を受けることができました。僕にとってとても良い経験になりました。

(寺西祐希)

所属するゼミ毎でテーマ選択に特徴があり、自分では考えつかないようなテーマが多くとても印象深かったです。テーマに対する意見交換も活発で、改善点や新たな知見を得ることができとても有意義な時間でした。今回の人類学フェスティバルを通じて、自分の関心についてより深く考えることができ、卒論製作に向けての良い刺激になりました。

(山岡真緒)

## 東ゼミ (名古屋大学文学部人類文化学専攻)

私は、人類学フェスティバルに参加して、2つのことに気づきました。まず、改めて人類学という学問の幅の広さを実感しました。私が所属しているゼミ以外で、卒論研究についてお話を伺う機会が無いため、なかなか幅広いテーマに触れることがありませんでした。今回皆さんがテーマに挙げられていたアダルトチルドレンや都市の貧困比較などの多様な視点での研究は、人類学のテーマの広さを象徴しているように私の目に映りました。加えて、フェスティバルの参加者全員が卒業研究に対して真摯に取り組んでいるということです。皆さん、卒業研究でのフィールドワークや文献調査などを十分に行われているにもかかわらず、他のパネラーや先生方の意見を真摯に受け止められ、それを今後の研究に活かしていこうとされていました。その積極的な姿勢がフェスティバルをより面白いものにしていましたし、私も卒論をさらに質のよく、読者が全員納得出来るものにしてというモチベーションをもらいました。これまで経験したことのない他大学の方々とディスカッション、卒論を書いた4年生として初参加ということから、非常に緊張しておりました。ですが、参加された皆さんが私の意見に耳を傾けてくださり、また、私の卒論テーマに関して有意義な質問をくださったので、貴重な時間を過ごすことが出来ました。ご招待いただきまして、ありがとうございます。

(田中大雄)

## 岡部ゼミ (中京大学現代社会学部)

討論の内容の濃さに驚いたという事が今回の人類学フェスの率直な感想である。今まで何度か発表を聞き質疑応答を行うという場面は経験してきたが、質問に対して答えを述べるだけという一問一答の様なものが多かった様に感じる。それに対し、今回の人類学フェスでは質問・応答に続きその応答に対する更なる質問や意見が目立った。これにより、議題に対する意見がより多くの人から集まり様々な視点を知る事ができた。質問の存在が質問した側の理解に繋がるのみで無く、発表者側も更に理解を深めるきっかけになっていた。

今回の討論で上がった内容としては、中国におけるホワイトデーが本来関連のない七夕の文化に関連付けられたことから考えられるホワイトデーというイベントの商業

的思惑や（これに関しては張先生の文献があるそう）  
 そもそも海外では男性から女性へ贈り物を行うバレンタインが、なぜ日本では女性から男性へチョコレートを贈るイベントに変化したのかなど多くの疑問点が浮上した。  
 今回得られた知識や疑問点を今後の調査に含め、質の高い研究に繋げたい。（岡部朋佳）

自分のポスターについて多くの意見をもらい、とても参考になった。自分からは出てこなかった疑問や着眼点を知ることができ、自分のテーマがより一層興味深いものになった。また、普段知る機会がない他大学の学生

の研究がポスターを見るだけでも面白かった。海外の新興宗教や国家ブランディングなど、普段知ろうともしていなかったことだったがポスターで分かりやすく、質問もできたのでさらに関心が高まった。久しぶりに ZOOM で会話をしたので、話し出すのは緊張したものの、後半は楽しく参加できた。アンソロポリウムでは、プラネタリウムを見に行ったことはないが本当にプラネタリウムを見ているようで心地良かった。星座は全く詳しくはないが、オリオン座だけは分かるなど思っていたら、それを指摘されその理由も分かり驚いたが面白かった。大画面で見られたら良かったと残念に思う。

（梅田玲衣）

## 人類学フェスティバル2021★ONLINE

### プログラム

2022年1月23日（日）10:30～15:50

10:30 オープン				
A-1	B-1	C-1	D-1	
司会：高橋穂ノ花 (講師) 講師：鶴千咲 (ホスト) ホスト：宮崎千絵	司会：森下明璃 (講師) 講師：山岸未美 (講師) ホスト：岡部真由美	司会：竹内萌七 (講師) 講師：市野優美 (講師) ホスト：藤川美代子	司会：谷本佳穂 (講師) 講師：長瀬実理衣 (講師) ホスト：張玉玲	
10:35 恒川奈美 (張ゼミ)	安田美穂 (張ゼミ)	村山板子 (常沢ゼミ)	板谷菜生 (張ゼミ)	
10:50 浅野瑠弥 (岡部ゼミ)	春日井詩乃 (岡部ゼミ)	梅田玲衣 (岡部ゼミ)	岩橋夏央 (岡部ゼミ)	
11:05 藤代雅向・村田桃子 (上室ゼミ)	林亜記 (藤川ゼミ)	平井菜々香 (張ゼミ)	田中大陸 (張ゼミ)	
11:20 岡島沙良 (常沢ゼミ)	村井早月、村瀬早紀、鈴木しゅん菜、吉田真優 (上室ゼミ)	岡田京華 (常沢ゼミ)		
11:35 休憩 (5分)				
11:40 「アンソロポリウム2021 in Nanzan」(後ゼミ)1回目 (60分) 安藤匡輝、深谷ゆ美、原未夏、井戸端佐樹、伊藤未来乃、小池紗都、松下桃子、荻原凜、奥山航、池野薫、山本高之、小森裕夫				
12:40 休憩 (5分)				
A-2	B-2	C-2	D-2	
司会：藤代雅向 (上室ゼミ) 講師：板谷菜生 (張ゼミ) ホスト：堂沢千尋	司会：村田桃子 (上室ゼミ) 講師：浅野瑠弥 (岡部ゼミ) ホスト：奥賢太郎	司会：吉田真優 (上室ゼミ) 講師：小谷萌夏 (張ゼミ) ホスト：上室篤史	司会：鈴木しゅん菜 (上室ゼミ) 講師：大島果莉 (岡部ゼミ) ホスト：宮崎千絵	
12:45 安藤知葉 (岡部ゼミ)	鶴千咲 (藤川ゼミ)	杉山貴大 (岡部ゼミ)	福永千夏 (岡部ゼミ)	
13:00 長瀬実理衣 (藤川ゼミ)	谷本佳穂 (常沢ゼミ)	森下明璃 (常沢ゼミ)	鎗菜理絵 (常沢ゼミ)	
13:15 岡部朋佳 (岡部ゼミ)	渡邊有生希 (岡部ゼミ)	安川亜友子 (張ゼミ)	山岸未美 (岡部ゼミ)	
13:30 岡浦聖奈 (常沢ゼミ)	市野優美 (張ゼミ)		北條真由 (張ゼミ)	
13:45 休憩 (15分)				
A-3	B-3	C-3	D-3	
司会：村山板子 (張ゼミ) 講師：村瀬早紀 (上室ゼミ) ホスト：岡部真由美	司会：村井早月 (上室ゼミ) 講師：岡田京華 (張ゼミ) ホスト：藤川美代子	司会：岡島沙良 (張ゼミ) 講師：安川亜友子 (張ゼミ) ホスト：張玉玲	司会：杉山貴大 (張ゼミ) 講師：北條真由 (張ゼミ) ホスト：上室篤史	
14:00 寺西祐希 (張ゼミ)	山岡真緒 (張ゼミ)	榊原望佳 (張ゼミ)	小谷萌夏 (張ゼミ)	
14:15 高橋穂ノ花 (藤川ゼミ)	大島果莉 (藤川ゼミ)	竹内萌七 (藤川ゼミ)	平下歌菜歩 (藤川ゼミ)	
14:30 小泉由幹 (岡部ゼミ)	山本華康 (岡部ゼミ)	山崎未来 (岡部ゼミ)	澤田志侑 (岡部ゼミ)	
14:45 休憩 (5分)				
14:50 「アンソロポリウム2021 in Nanzan」(後ゼミ)2回目 (60分) 安藤匡輝、深谷ゆ美、原未夏、井戸端佐樹、伊藤未来乃、小池紗都、松下桃子、荻原凜、奥山航、池野薫、山本高之、小森裕夫				
15:50 クローズ				

Good

卒業に向けた発表を  
基に、大学・ゼミを  
越えて交流します。  
(一般非公開です)

Fun

毎年恒例のプラネタ  
リウムもオンラインで  
お楽しみください  
☺️視聴方法

Wonderful

「アンソロポリウム2021  
in Nanzan」視聴方法

- ★ 視聴希望される方は、下記より事前受付をお願いします。
- ★ 受付された方に、zoomの招待状をお送りします。(返信メールが迷惑メールに入っていないかどうか確認をお願いします。)
- ★ 受付締切：1月23日15時

(登録フォーム)  
[https://regist.nanzan-u.ac.jp/regist/regist/jinnuiken\\_exception/fes0123](https://regist.nanzan-u.ac.jp/regist/regist/jinnuiken_exception/fes0123)



# 活動報告 [2021年度]

## シンポジウム

### 第1回 公開シンポジウム Beyond the Silos: Big Problems Like Climate Change Require New Approaches (Asian Ethnology Series 4)



日時 2021年6月25日(金) 10:00～11:30  
会場 Zoom Webinar (オンライン)  
主催 南山大学人類学研究所  
司会 Dorman, Benjamin (人類学研究所・第一種  
研究所員)

プログラム 10:00 Introduction Benjamin Dorman  
10:05 Symposium  
Ruth Gamble (La Trobe University)  
Gillian Tan (Deakin University)  
Sara Beavis (The Australian National University)  
James Pittock (The Australian National University)  
John Powers (Deakin University)  
11:00 Q&A

This symposium brought together scholars of history (Ruth Gamble), anthropology (Gillian Tan), religious studies (John Powers), and scientists (Sara Beavis and James Pittock) who discussed their respective approaches to issues related to developing an environmental history of Tibet's rivers. Most academic projects do not go beyond the boundaries of specific disciplines, yet this project is unique in that it draws together these scholars to form a truly multidisciplinary project. The focus of the project is on Tibet's rivers and the environmental problems that arise from climate change, and the effects of changes on global hydrological patterns, which affect rain fall patterns. John Powers, the project leader, first gave an overview of the project, then each researcher presented a brief description of their work related to the project. This was followed by a lively discussion involving 21 participants. One of the most valuable parts of the discussion was what each researcher felt they learnt from disciplinary approaches they were not familiar with, how these impacted their thinking, and how they might approach their work with these in mind.

(Dorman, Benjamin)

## 第2回 公開シンポジウム 王と国家

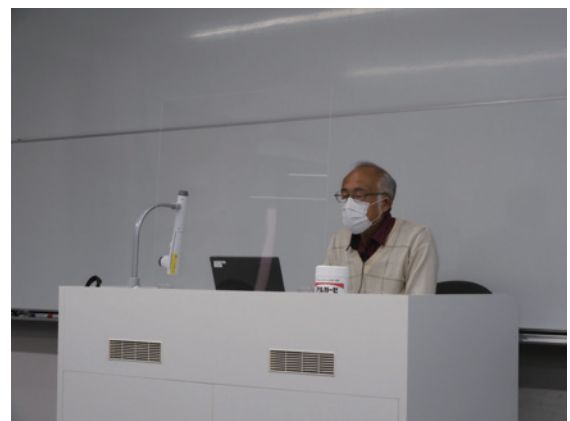
- 日時 2022年3月30日(水) 14:00 ~ 17:00
- 会場 南山大学 Q 棟 Q103 教室  
(オンライン発信あり)
- 主催 南山大学人類学研究所
- 司会 渡部森哉 (人類学研究所・所長)
- プログラム 「趣旨説明」(渡部森哉)  
「中世ヨーロッパの巡幸王権」  
岡地稔 (南山大学・名誉教授)  
「ハワイ王国におけるカメハメハ大王の役割」  
後藤明 (人類学研究所・第二種研究所員)  
「古代アンデスのインカ王とタワンティンスユ」  
渡部森哉  
ディスカッション

王という個人と、国家という制度の関係について、地域、時代の異なる3つの事例について報告がされた。報告者はそれぞれ、歴史学、文化人類学、考古学を専門としている。今回のシンポジウムは、ある分析の枠組を当てはめるという構成ではなく、同一のテーマに関して議論することによって、互いの研究のヒントを得ることを目指した。個人の特質を議論するために、王の歴史的記録の存在する事例が取り上げられた。こうした議論を文字のない時代、地域にも展開することが今後の課題の1つである。

岡地報告は、中世ヨーロッパの巡行王権という政治形態について、ドイツとフランスの事例を比較しつつ検討した。後藤報告は、ハワイのカメハメハ王を取り上げ、ヨーロッパ人との接触時にどのような変化

が生じており、その中でいかにカメハメハが台頭したのかを考察した。渡部報告は、古代アンデスのインカ帝国の拡張初期、スペイン人との接触時にどのような構造変化が生じつつあったのかを考察した。

本シンポジウムはハイブリッド形式で開催され、対面で12名、オンラインで38名の計50名が参加した。  
(渡部森哉)



# 公開講演会

## 第1回公開講演会

### Representations of Deaf People in Japan: Inspiration, Outrage and Real Life



日時	2021年5月14日(金) 10:00～11:30
会場	Zoom Webinar (オンライン)
主催	南山大学人類学研究所
講師	Steven C. Fedorowicz 氏 (Kansai Gaidai University)
司会	Mark Bookman 氏 (University of Tokyo)
コメンテーター	Dorman, Benjamin (人類学研究所・第一種研究員)
使用言語	英語 (PC 通訳 (CART) あり)
プログラム	10:00 Introduction : (Dorman, Benjamin) 10:05 Lecture : (Steven C. Fedorowicz) 10:50 Comment/Response (Mark Bookman) 11:05 Q&A

This webinar was the second in the Disability and Japan in the Digital Age series. There were 35 people in total participating in the webinar, joining in from 11 countries.

Steven C. Fedorowicz, who is a cultural anthropologist, visual anthropologist, and associate professor of anthropology in the Asian Studies Program at Kansai Gaidai University, presented the lecture, which focused on examining representations of deaf people in Japan as related to so-called "inspiration porn." "Inspiration porn" is the

idealization of disabled people doing everyday tasks (e.g. riding a train, having a job) or for achievements having nothing to do with their particular disability (e.g. deaf athletes).

He discussed cross-cultural examples, academic models, observations, and perspectives will be discussed to explore how disabled and deaf people are portrayed in various media.

Japanese deaf people are often critical of the representations of deaf protagonists and characters in popular television dramas and movies. Such representations create strong but inaccurate images of deafness and sign language that ultimately serve to perpetuate deficit models of disability. On the other hand, representations of disabled/deaf people themselves challenge and add to a social welfare discourse, leading to (re)evaluations of societal norms and attitudes towards disability.

Fedorowicz also discussed about his ongoing project concerning media representations of deaf people and culture in Japan, ongoing project concerning media representations of deaf people and culture in Japan, and his introduction to his studies on and experiences with deaf communities. He also touches on his personal experiences that his understandings and approaches to deaf communities and disability studies.

Mark Bookman, the co-coordinator of the series with Benjamin Dorman, responded with comments concerning representations of people with disabilities in general.

The full webinar can be viewed at the following link: <https://vimeo.com/591915763>

(Dorman, Benjamin)



## 第2回公開講演会

## 沼澤喜市先生をフィールドワークする



■ 日 時:  
2021年11月8日(月) 15:30~17:10

■ 会 場: 南山大学 G26教室 (オンライン配信あり)

■ 主 催: 人類学研究所 / 共 催: 人文学部人類文化学科

■ 人類学研究所には初代所長だった沼澤喜市先生(1907-1980)が残した新聞の切り抜き、論文の草稿、大学業務に関するもの、フィールドワークの調査ノートや日記、卒業、手紙、地図、神言会での活動に関するもの、その他研究資料が多く残っています。これら資料からは、当時の東ニューギニアや愛知原由緒社でのフィールドワークの様子、大学での講義、神言会神父と人類学者との関わりなどの姿を知ることができます。今回はこれら資料を「フィールドワーク」する方法を考えてみませんか。

■ プログラム:  
15:30~15:35 趣旨説明(宮脇千絵/人類学研究所)  
15:35~16:35 沼澤先生の足跡をたどる—人類学と大学(湯屋秀捷/人類文化学科人類学専攻)  
16:35~16:45 沼澤資料フィールドワークの可能性(宮脇千絵)  
16:45~17:10 質疑応答

■ 当日、講演会の様子をオンライン配信します。視聴をご希望される方は、11月7日までに人類研(air-nusic@nanzan-u.ac.jp)までご連絡ください。

お問い合わせ先: 南山大学人類学研究所  
Phone: 052-832-3111 (代表) | Email: air-nusic@nanzan-u.ac.jp  
URL: <http://na.nanzan-u.ac.jp/ir/nusic/> | Facebook: 「人類学研究所」で検索

日時 2021年11月8日(金) 15:30~17:10

会場 南山大学 G26 教室(オンライン配信あり)

主催 南山大学人類学研究所

共催 南山大学人文学部人類文化学科

講師 湯屋秀捷(南山大学人間文化研究所人類学専攻博士前期課程)

司会 宮脇千絵(人類学研究所・第一種研究員)

使用言語 日本語

プログラム 15:30 「趣旨説明」 宮脇千絵

15:35 「沼澤先生の足跡をたどる—人類学と大学」 湯屋秀捷

16:35 「沼澤資料フィールドワークの可能性」 宮脇千絵

16:45 質疑応答

人類研にとって久しぶりの対面実施(オンライン配信もあり)が可能となったこの講演会は、人類文化学科の2年生に向けて、人類研に保管されている沼澤喜市先生の資料を紹介し、その活用方法を考えることを目的として実施した。

まず2019年度から2020年度にかけて、実際に資料の分類と目録製作にあたってくれた本学修士課程の湯屋秀捷氏から、神言会神父であり人類学者であった沼澤先生の略歴が紹介され、膨大な資

料を、「新聞」「論文」「大学業務」「フィールドワーク資料」「写真」等11のカテゴリーに分類して作業したことが報告された。そして今後の活用方法について、沼澤先生が参加した「東ニューギニア調査関連」、講義ノート等からうかがえる当時の「人類学と教育」の状況、個人のものとした資料を「個人の枠を越えて」どう価値づけていくのかというアーカイブスの可能性が提示された。

これを踏まえ宮脇千絵が、活用方法の一案を紹介した。資料のなかに、「東ニューギニア調査団」に中日新聞の記者および東海テレビのカメラマンが同行し、調査団帰国後に松坂屋で展覧会が開催されたことが分かるものが含まれていることから、1960年代の日本における海外学術調査や百貨店での海外文化の紹介の高まりを指摘し、当時の名古屋において「東ニューギニア調査団」がどのように組織・実施され、成果還元がされたのかを明らかにできる可能性があることを示唆した。

講演会には、人類文化学科の2年生のほか大学院生や修士生など40名の参加があった。

(宮脇千絵)



## 第3回公開講演会

現代中国における地域の「特色」をめぐる 開発と  
実践——雲南省ハニ族イ族自治州の事例をもとに  
（「現代中国における観光開発と社会変動」  
シリーズ No.4）

南山大学人類学研究所 2021年度 第3回公開講演会

現代中国における観光開発と社会変動 シリーズ

現代中国における地域の「特色」をめぐる  
開発と実践——雲南省ハニ族イ族自治州の事例をもとに

講師：阿部朋恒氏  
日本学術振興会特別研究員PD  
(立教大学異文化コミュニケーション学部)

日時：2021年12月18日(土)  
13:30～15:00

プログラム  
趣旨説明 13:30～13:35  
張玉玲・南山大学外国語学部・教授/  
人類学研究所・第二種研究員  
講演 13:35～14:50  
阿部朋恒・日本学術振興会特別研究員PD  
(立教大学異文化コミュニケーション学部)  
質疑応答 14:50～15:00

主催：南山大学人類学研究所  
会場：Zoom Meeting

概要  
本講演では、雲南省紅河ハニ族イ族自治州管轄下の3つの県における「文化資源開発」の事例をもとに、そこで打ち出される地域の「特色」が、人びとの生活実践のなかに行き交った新たな境界をもたらしていることを報告したうえで、現代中国における観光開発と文化変容の特徴について検討します。

どなたでも無料で参加できます。  
ご参加いただくには事前登録が必要です。ご参加される方は、下記よりお申し込みください。(締切：12月16日 23時59分)  
[https://regist.nanzan-u.ac.jp/regist/regist@nusiken\\_reception/20211218](https://regist.nanzan-u.ac.jp/regist/regist@nusiken_reception/20211218)

現代中国における観光開発と社会変動 シリーズ 趣旨  
特に2000年代後半、中国国内による観光産業の発展の過程に伴い、各地の地形・自然文化が観光資源として開発・復興・創造されていった。これによって、農村部と都市部がともに進まない「経済的、社会的、文化的変容」を見せてきた。本シリーズでは、現代中国の観光振興という文脈において、各地の歴史や文化が「資源」として動員されていく過程とそこで生じた社会的変容の関係を捉えていく。

お問い合わせ先：南山大学人類学研究所 ■Phone: 052-832-3111 (代表) ■Email: ai-nasik@nanzan-u.ac.jp  
■HP: <http://rci.nanzan-u.ac.jp/nusiken/> ■Facebook: 「人類学研究所」で検索

「現代中国における地域の「特色」をめぐる開発と実践——雲南省ハニ族イ族自治州の事例をもとに」と題する、2021年度人類学研究所第三回公開講演会は2021年12月18日に行われた。なお、今回の講演は2020年度から始めた「現代中国における観光開発と社会変動」シリーズの四回目となり、日本各地から26名の参加者があった。講師には、チベット、ビルマ語派諸民族の民族誌などを研究テーマとする、現在日本学術振興会特別研究員PD阿部朋恒氏が務めた。講演では、阿部氏が長期間にわたってフィールドワークを行われてきた雲南省紅河ハニ族イ族自治州管轄下の3つの県における「文化資源開発」が事例として取り上げられ、文化開発という名のもとで打ち出される地域の「特色」が、人びとの生活実践のなかに行き交った形で新たな境界をもたらされたことについて検討され、現代中国における観光開発と文化変容の一端が浮き彫りにされた。

(張玉玲)



日時	2021年12月18日(月) 13:30～15:10
会場	Zoom Webinar (オンライン)
主催	南山大学人類学研究所
講師	阿部朋恒(日本学術振興会特別研究員PD / 立教大学異文化コミュニケーション学部)
司会	張玉玲(人類学研究所・第二種研究員)
使用言語	日本語
プログラム	13:30 「趣旨説明」 張玉玲 13:35 講演「現代中国における地域の「特色」をめぐる開発と実践——雲南省ハニ族イ族自治州の事例をもとに」 阿部朋恒 14:50 質疑応答

# 人類学フェスティバル

## 「人類学フェスティバル」2021 ★ ONLINE



日時	2022年1月23日(日)、10:30～15:30
会場	Zoom Meeting (オンライン)
主催	南山大学人類学研究所
共催	南山大学人文学部人類文化学科・外国語学部 アジア学科・中京大学現代社会学部
コーディネイト	岡部真由美・藤川美代子・宮脇千絵

### 1. アンソロポリウム 2021 in Nanzan Presented by 後藤明ゼミ (人類文化学科 / 人類学研究所)



時間 ① 11:40～12:40 ② 14:50～15:50

後藤ゼミの学生が3グループに分かれて動画作成、動画配信をおこないました。アンソロポリウム上映班は南山大学の空から出発しアラスカ、タヒチ、マ

チュピチュの星空を映し出し、美しいナレーションで解説してくれました。展示解説班は「人々の生活に息づく星空の世界」と題し、プレアデス星団を紹介してくれました。ワークショップ班は「My プラネタリウムを作ろう」と題し、身近にあるものでプラネタリウムを作成する方法を教えてくださいました。コロナ禍にあって学生たちが創意工夫しながら取り組んだ成果を、約80名の方(2回開催ののべ人数)が視聴してくれました。

### 2. 学生によるポスター発表&交流会

Presented by 藤川美代子ゼミ、宮沢千尋ゼミ、上峯篤史ゼミ (以上、南山大学人文学部人類文化学科)、張玉玲ゼミ (南山大学外国語学部アジア学科)、岡部真由美ゼミ (中京大学現代社会学部)、東賢太郎ゼミ (名古屋大学文学部)

藤川美代子ゼミ、宮沢千尋ゼミ、上峯篤史ゼミ (以上、南山大学人文学部人類文化学科)、張玉玲ゼミ (南山大学外国語学部アジア学科)、岡部真由美ゼミ (中京大学現代社会学部)、東賢太郎ゼミ (名古屋大学文学部) の3、4年生が卒論に向けた成果をポスターで発表し、オンラインでディスカッションをおこないました。議長や議事録係も学生が務め、大学やゼミを越えて活発な議論が展開されました。一般には非公開でしたが、学生46名、教員7名のほか、愛知淑徳大学交流文化学部の学生もオブザーバー参加してくれました。

詳しくは、特集ページをご覧ください。



# 共催企画

## 共催講演会

祖先から先人へ：

シンガポール華人による死者救済と萬縁勝会



日時	2021年5月7日(金) 11:05 ~ 12:45
会場	Zoom Webinar (オンライン)
主催	南山大学外国語学部アジア学科
共催	南山大学人類学研究所
講師	蔡志祥(香港中文大学歴史学部・教授)
司会	張玉玲(人類学研究所・第二種研究員)

2021年5月7日(金) 11:05 - 12:45、外国語学部アジア学科主催、人類学研究所共催の講演会「從祖先到先人：新加坡華人的死後救贖與萬縁勝會」(祖先から先人へ：シンガポール華人による死者救済と萬縁勝会)が行われました。講師である香港中文大学教授蔡志祥 Choi Chi-cheung は、シンガポールの華人が国民国家の発展における土地利用の問題に対応しつつ、墓地の移転における靈魂の鎮撫と帰属の問題を解決してきたプロセスを詳細に検討し、死者救済の角度から華人の「落地生根」(居住地に根を下ろした)の変化を具体的に浮き彫りにしました。また、死者を「追悼」する目的は、祖先が無縁仏になり、コミュニティに禍や祟りをきたすことがないようにすることであり、定期的に行われる中元節や萬縁勝会などの祭祀は、こうした「個人

性格」のある (individual characteristics) 祖先を「集団的性格」(collective characteristics) を持つ先人へと昇華させる役割を果たしているという華人の他界観の諸相も豊富な写真、映像資料とともに提示してくださいました。本講演会は授業「華人文化研究」(担当張玉玲)の一環として企画されたもので、112名の学生がZOOMにて受講しました。

(張玉玲)

**儀式、族群与阶级**

異なる方言グループを結びつける墓と魂の儀式

- 20世紀以降：階級の緊張を解消する儀式として
- 萬縁勝会：19世紀末の広東地方の反迷信（反スーパーstitiション）運動の産物
- 國の英雄と殉教者の記念を強調する
- グレートハーモニーのアイデア（大同思想）に一致する万人救済の儀式
- 東南アジアにおける華人社会の背景：
  - 階級の緊張を解消し、民族グループを統合するための「祭祀道具」
  - 仏教と道教
  - 中国語（仏教、儒教）、広東語（道教）、客家（尼）
  - 宗教的チャリティー（宗教慈善）
- 宗族祠堂のない遷徙社会では、離散にならないように「遠い」と「望まない」先祖が儀式により配置されていた。
- これらの魂を個人的および子孫がいる祖先から集合的および制度的祖先に再定義します

したがって、地域の一族のズムを欠くのではなく、大衆の幽霊 (wandering ghost) にならないように「疎遠」および「不要な」祖先を配置する方法に直面した場合、死者を再定義する必要があります。社会的集団の力によって、個人的、子孫いる祖先から集団的で制度的な祖先に変わります。

## 共催シンポジウム Made in Japan のものづくり

シンポジウム  
Made in Japan のものづくり

2022  
3/13 (日)  
13:30-16:30  
オンライン Zoom 開催

日本での関わりが見直され、価値づけられていくなかで、「Made in Japan」とは何を指すのでしょうか。また、「Made in Japan」のもつ意味とは何でしょうか。ファッションの文脈において考えます。

【プログラム】

【登壇者】 宮脇千絵 白水高広 高馬京子 藤田裕史 池上慶行

13:30 開始  
13:30-13:50 ファシリテーター 金谷美和(国際ファッション専門職大学・准教授) 丹羽朋子(国際ファッション専門職大学・講師) 司会・趣旨説明 宮脇千絵・南山大学・准教授  
趣旨説明 Made in Japan のものづくりを考える

13:50-14:20 発表1) 白水高広・株式会社うなぎの寝床・代表取締役 地域文化商社として服・店・情報・ツーリズム総合力で伝達

14:20-14:50 発表2) 高馬京子・明治大学・准教授 フランスにおける「メイドインジャパン・ファッション」の表象の変遷

14:50-15:00 休憩

15:00-15:20 コメント1) 藤田裕史・京都精華大学・准教授/副学長

15:20-15:40 コメント2) 池上慶行・land down under・代表

15:40-16:30 質疑応答・ディスカッション

16:30 終了

【申し込み方法】  
以下のサイト、もしくはQRコードから参加申し込みをしてください。  
参加費の受付は、3月10日(木)です。  
申し込みをされた方は、前日までLINEのコミュニティページをお送りします。  
<https://docs.google.com/forms/d/1XCBuGfRj3CG40Q5GAd2jP8v3r161gq889M8J0M1vd8/usp=sharing>

主催 国際ファッション専門職大学  
事業共同実施 「コンテキスト・ゾーンとしての現代ファッション」(即学第一代巻・2019年度～2021年度)  
共催 南山大学人類学研究所

- 日時 2022年3月13日(日) 13:30～16:30
- 会場 Zoom Meeting (オンライン)
- 主催 国際ファッション専門職大学
- 共催 南山大学人類学研究所
- ファシリテーター 金谷美和(国際ファッション専門職大学)  
丹羽朋子(国際ファッション専門職大学)
- プログラム
- 13:30 趣旨説明：宮脇千絵(人類学研究所・第一種研究所員)  
「Made in Japan のものづくりを考える」
- 13:50 発表1：白水高広(株式会社うなぎの寝床)「地域文化商社として服・店・情報・ツーリズム総合力で伝達」
- 14:20 発表2：高馬京子(明治大学)  
「フランスにおける「メイドインジャパン・ファッション」の表象の変遷」
- 14:50 休憩
- 15:00 コメント1：藤田裕史(京都精華大学)
- 15:20 コメント2：池上慶行(land down under)
- 15:40 質疑応答・ディスカッション

2010年代以降、Made in Japanとあらわされるファッションに関連するものづくりや製品が増えているが、そこで表象されるものは多様であり、その内実がよく分からないという現状に対し、生産の現場に携わっている人と研究者が議論をおこなった。

白水氏は、地域文化を商品として伝える立場から、どのように地域資源を解釈し、担い手と使い手をつなげるのかという実践に関わる考えについての

発表をおこなった。続く高馬氏は、フランスにおけるMade in Japanについて、キモノ、「かわいい」などの事例から、他者(海外)からの目があってこそMade in Japanが成り立つと説明した。

コメントーターの蘆田氏からは、地域文化を伝えることに関し各地域の差異化はどのようにおこなっていくのか等いくつかの論点が指摘された。同じくコメントーターの池上氏は、自身が立ち上げた循環経済をテーマとしたブランドの紹介とともに、アイテムとMade in Japanの関係などが指摘された。

質疑応答・ディスカッションでは参加者からの質問も出され、活発な議論がおこなわれた。

(宮脇千絵)



# 共同研究会

## 人類学研究所共同研究

【人類学・考古学の「大きな理論」と「現場の理論」】

(2019～2021年度)

代表：宮脇千絵（人類学研究所）

人類学者・考古学者はフィールドでの出来事を、民族誌としてまとめあげる過程で、理論的な考察をおこなうことで、学問への貢献を果たす。一方で、1990年代以降、いわゆるマリノフスキーを典型とするスタイルにとどまらない、多様なフィールドワークや記述方法の模索、理論構築の試みがおこなわれている。それゆえ、その学問的営みがもはやホリスティックな理論に集約させることだけが目的ではない、もしくは各論の積み上げが主流となることによって誰しもが拠るメジャーな理論自体が不在となっているかのような状態にある。また、現地の研究者やインフォーマントとの協働がますます要請される現在において、その成果のとりまとめには、むしろ現地において構築された理論への理解が不可欠であろう。

それでは、いわゆる「大きな理論」と、各地において構築されてきた「現場の理論」はどのような関係にあるのだろうか。本研究会では、人類学・考古学における「大きな理論」をメンバー全員で整理し、同時に各メンバーがフィールドにおける「現場の理論」を報告することを通じて、人類学・考古学における両者の関係性を検討する。この取り組みは、転換期を迎えている人類学・考古学的思考の再検討を図ることを可能にするとともに、フィールドに立つ我々研究者ひとりひとりが眺める理論の定点観測の共有にもつながると考える。

このような問題意識のもと、最終年度にあたる2021年度は3回の研究会を実施したが、いずれも新型コロナウイルス感染拡大の影響による、オンラインでの実施となった。

### 第1回研究会

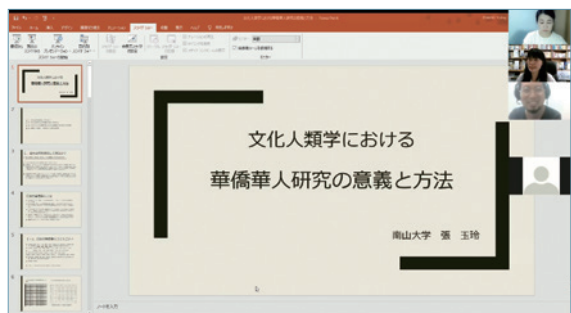
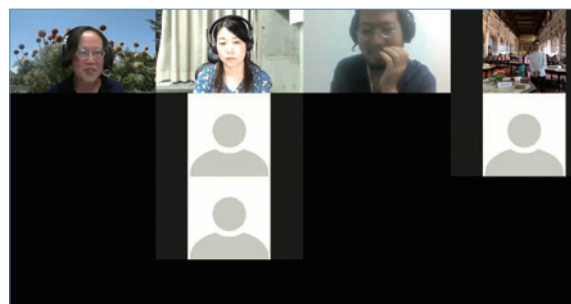
- 日時 2021年6月27日(日) 15:00～17:30
- 会場 Zoom Meeting(オンライン)
- 発表① 張玉玲(南山大学)  
「文化人類学における華僑華人研究の意義と方法」
- 発表② 藏本龍介(東京大学)  
「聖典宗教の人類学に向けて」

### 第2回研究会

- 日時 2021年10月10日(日) 15:00～17:30
- 会場 Zoom Meeting(オンライン)
- 発表① 中尾央(南山大学)  
「理論のトリセツを考える」
- 発表② 石原美奈子(南山大学)  
「聖者の人類学」

### 第3回研究会

- 日時 2022年2月24日(木) 13:00～15:00
- 会場 Zoom Meeting(オンライン)
- 発表① Dorman Benjamin(南山大学)  
「Stolen Generations: Case studies of indigenous peoples and minorities in Australia」
- 発表② Petersen Esben(南山大学)  
「Stolen Generations: Case studies of indigenous peoples and minorities in Denmark and Greenland」





# プロジェクト

## 沼澤喜市資料整理プロジェクト報告

宮脇千絵 (人類学研究所)

人類学研究所には初代所長であった沼澤喜市先生(1907～1980)の論文や原稿、調査記録や手紙、大学業務に関する書類といった紙を中心とする資料群が残されている。2010年ごろから大学院生を中心として整理・分類作業がおこなわれ、封筒に入れられた状態で保管されていた。2019～2020年度にかけては、資料へのアクセスを考慮した再分類とエクセルによる目録作成がおこなわれた(湯屋2021)。その結果、封筒の数は497点、資料は2029点にものぼった。

これを踏まえ、2021年度からは資料のデジタル化に取りかかることとした。紙資料は、そのまま保管しているといずれ劣化してしまう。また、資料群へのアクセスが容易にならなければ、活用が難しくなり宝の持ち腐れになる。デジタル化をすすめることで、これらが解消されると考えた。長期的な作業になることを見据え、プロジェクト研究員の加藤英明さんにコーディネーター役を依頼し、さらに人類文化学科の学生2名をアルバイトとして雇用し、プロジェクトとしての体制を整えた。アルバイトをしてくれるのは、2021年11月に開催した公開講演会「沼澤喜市先生をフィールドワークする」を聴講し、関心を持ってくれた学生である。

まずは保管環境を整えるため、中性紙保存箱(もじょ箱)を購入し、封筒ごとそこに入れる作業をおこなった。箱には、防虫剤を入れ、箱番号と袋番号を記したラベルを貼り、目録と紐づけさせた。箱の数は47点になった。次に、スキャナ等の機材を揃えた。ようやくスキャン作業に入っていくのだが、繊細でサイズや材質も多様な紙資料をいかにきれいに画像データとするのか、ファイルの名称をどのように付していくのか等、検討すべきことはまだ多い。データベースの完成形をイメージしながら模索が続く。

沼澤喜市資料からは、1960年代の日本における海外学術調査の様子や人類学の役割、また神父と

人類学者との関係なども明らかになることが期待できる。2022年度も引き続きスキャン作業をおこなっている。

### 参考文献

湯屋秀捷 2021「沼澤喜市資料整理報告」『人類学研究所通信』21:16-17。



学生アルバイトによる作業風景

## Asian Ethnology 第80号記念

ドーマン・ベンジャミン (人類学研究所)

*Asian Ethnology* (以下、AEと略)は、1942年の創刊以来、2021年に重要な節目を迎え、記念すべき創刊80号を刊行した。また同時にAEのウェブページのリニューアルを図った。この学術誌は過去80年間に及び様々な名称の元で、以下のような旅路を遂げた。元編集長P.クネヒトの言葉を借りれば、この学術誌は「再生の連鎖」(Knecht 1980, 2)を経験したのである。

1942年、初代編集長である神言会(SVD)の聖職者M.エダーにより、AEは*Folklore Studies*として、北京の輔仁(Fu Jen)大学東洋民族学博物館の機関誌として刊行された。1949年、M.エダーは文化大革命の国外退去を余儀なくされた際に、創刊者とともに日本へと渡り、その発行に尽力した。1966年にR.ドーソン(インディアナ大学民族学科教授)と提携し、*Asian Folklore Studies* (以下、

AFSと略)と名称を変更し、1979年、人類学研究所の機関誌として出版された。1973年に、M.エダーは、南山大学へ着任し、副編集長のP.クネヒトと共にAFSの編集に励んだ。1980年のM.エダー急逝に伴い、P.クネヒトがその後継者として2006年まで二代目の編集長を務めた。「アジアの伝統文化に対する理解を深める為の効果的な媒体として、またアジアと非アジアの学者が意見を交換する場として」(Chilson and Schnell 2006, 2)この学術誌を英語で刊行することを維持したのである。さらに2007年にB.ドーマンが編集長となり、現在に至る。2007年よりAFSは南山宗教文化研究所から発行された。2008年は大きな転換期を迎え、B.ドーマンとS.シュネル(アイオワ大学人類学教授)が共同編集長となり、国際的な編集委員会を設立した。同時に、ジャーナルの繁栄およびその質をより向上させるために、投稿論文を受理する前に評価する二重完全査読システムを導入した。また、“folklore”という名称では、より良い論文が投稿され難いと判断し、欧米における“folklore”という用語の使用をめぐる政治的問題や学術的論争をふまえ、ジャーナルが従来対象としてきた内容、つまり人類学、民族研究やアジア研究、そして“folklore”の交点上にあるものをより具体的に表現する名称が必要であるとし*Asian Folklore Studies*は*Asian Ethnology*と改称した。2012年にS.シュネルに代わり、F.コロム(ボストン大学教授)が共同編集長となり、現在に至る。2017年より再び、元の拠点でもある人類学研究所からの刊行となった。AEはテーマに沿った特集号も含めて、年間2号を出版している。2017年より新たな活動としてSNSによる発信、「Asian Ethnology Podcast」を展開し、2021年には以下二つを発信した。

Interview with John Powers: Tibet's Rivers, Climate Change, and Environmental History  
<https://asianethnology.org/page/podcastpowers>

Interview with Peter Knecht: Part2. Experiences as the journal editor  
<https://asianethnology.org/page/>

podcasttwoknecht

新たに2020年からは「Asian Ethnology Series」としてシンポジウムや講演会を企画、実施し2021年はBook-Talk “Urban Migrants in Rural Japan: Between Agency and Anomie in a Post-growth Society”及びSymposium “Beyond Silos: Big Problems Like Climate Change Require New Approaches”において多くの反響があった。

私たちは、この学術誌とそれに関連する活動を通じて、革新的なアイデアを推進し、*Asian Ethnology*に新しい息吹を吹き込み、より広くアジアに関する学問に貢献することをどんな些細なことでも追及し続けることを決意する。また、本誌や関連する活動を通じて、より広くアジアに関連する研究に貢献できるよう、微力ながら尽力していきたいと思う。過去から現在に至るまで、私たちのプロジェクトへのサポート及び、貴重な時間を割いてくださったすべての方々に感謝の意を表したい。

#### 参考文献

Knecht, Peter. 1980. “Obituary: Dr. Matthias Eder, (1902–1980).” *Asian Folklore Studies* 39 (2): 1–7.  
 Chilson, Clark, and Scott Schnell. 2006. “Editors’ Introduction.” *Asian Folklore Studies* 66: 1–4.

# 研究業績

## 第一種研究所員

### DORMAN, Benjamin

#### 編著

ドーマン・ベンジャミン (編). 『(じんるいけん Booklet 2021 Vol.8) フィードバック: 戦後における補聴器が成したリズム感形成 (モンデリ・フランク) / Feedback: How the hearing and molded a regime of rhythm in the postwar period, by Frank Mondelli』(人類学研究所公開講演会「デジタル時代における障がいと日本」シリーズ講演録), 2022年3月。

#### 寄稿

“Editors’ Note,” *Asian Ethnology* 80(1): 1-5.

#### 研究会・シンポジウム報告

「盗まれた世代～オーストラリアにおける先住民とマイノリティーの事例について」人類学研究所共同研究「人類学・考古学の「大きな理論」と「現場の理論」」、南山大学(オンライン)、2022年2月24日。

### 宮脇千絵

#### 編著

蘆田裕史, 藤嶋陽子, 宮脇千絵 (編) 『クリティカル・ワード ファッションスタディーズ—私と社会と衣服の関係』フィルムアート社, 2022年3月。

#### 研究会・シンポジウム報告

「ろうけつ染め・シルクスクリーンプリントにみるモン衣装の伝統性の推移」国立民族学博物館共同研究「伝統染織品の生産と消費——文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって」、国立民族学博物館(オンライン)、2021年7月3日。

「(趣旨説明) Made in Japan のものづくりを考える」国際ファッション専門職大学・基盤共同研究シンポジウム「Made in Japan のものづくり」、国際ファッション専門職大学(オンライン)、2022年3月13日。

#### 講演

「沼澤資料フィールドワークの可能性」南山大学人類学研究所第2回公開講演会「沼澤喜市先生をフィールドワークする」、南山大学、2021年11月8日。

「普段着と晴れ着—中国雲南省ミャオ族(モン)の装いの実践」名古屋大学博物館・南山大学人類学博物館連携博物館講座「地球と人類のヒストリー」、名古屋大学博物館・南山大が鶴人人類学博物館(オンライン)、2021年11月20日。

#### 書評

「池谷和信(編)『ビーズでたどるホモ・サピエンス史——美の起源に迫る』、昭和堂、2020年」『年報人類学研究』12:296-300。

## 博士研究員

### 中川朋美

#### 論文

「青谷上寺地遺跡における暴力の位置づけ」『物質文化』101:105-121。

中川朋美, 中尾央, 金田明大, 田村光平「SfMとレーザー計測による古人骨計測の比較」『奈文研論叢』3: 39-64。

野下浩司, 金田明大, 田村光平, 中川朋美, 中尾央「遠賀川式土器の形態に関する数理的考察: 田村遺跡、矢野遺跡、綾羅木郷遺跡を中心に」『奈文研論叢』3:65-82。



Tomomi Nakagawa, Kohei Tamura, Yuji Yamaguchi, Naoko Matsumoto, Takehiko Matsugi, Hisashi Nakao. Population pressure and prehistoric violence in the Yayoi period of Japan, *Journal of Archaeological Science* 132, 105420.

#### 研究会・シンポジウム報告

「青谷上寺地遺跡における暴力」、考古学研究会第67回総会・研究集会、岡山大学（オンライン）、2021年4月24日。

中尾央, 金田明大, 田村光平, 中川朋美, 野下浩司「遠賀川式土器の二次元・三次元定量解析結果の比較」、考古学研究会第67回総会・研究集会、岡山大学（オンライン）、2021年4月24日。

「弥生時代中期の北部九州における暴力と階層性の関係性」、日本考古学協会第87回総会研究発表、専修大学（オンライン）、2021年5月23日。

中尾央, 金田明大, 田村光平, 中川朋美, 野下浩司「SfMとレーザースキャナーによる遠賀川式土器の三次元計測」、日本考古学協会第87回総会研究発表、専修大学（オンライン）、2021年5月23日。

「弥生時代における暴力と階層性」、南山大学ランチョンミーティング、南山大学（オンライン）、2021年7月28日。

金田明大, 中川朋美, 野下浩司, 田村光平, 中尾央「SfM/MVSモデルとレーザースキャナーモデルの手法と精度の比較」、日本文化財科学会第38回大会、岡山理科大学（オンライン）、2021年9月19日。

「セッション1「暴力と身体」日本列島における暴力」新学術領域研究（研究領域提案型）2019年度～2023年度「出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」第6回全体会議 文明形成とコンフリクト、岡山コンベンションセンター（オンライン）、2022年1月8日。

#### 講演

「日本考古学にみる先史時代の性差」名古屋市

女性会館令和3年度後期主催講座「『女性』を通してみる日本の歴史」、名古屋市女性会館（イーブル名古屋）、2022年1月31日。

#### その他

吉田真優, 中尾央, 中川朋美「朝日遺跡出土資料の三次元記録」『あいち朝日ミュージアム研究紀要』1(1):37-40。

中川朋美「新刊紹介：設楽博己著『顔の考古学』吉川弘文館」『考古学研究』68(1):102。

### プロジェクト研究員

## 高村美也子

#### 寄稿

「スワヒリ語圏内の民族語ボンデイ語のことわざの伝承」、日本ことわざ文化学会 HP ことわざ研究 / 談話室 (<https://www.kotowaza-bunka.org/2021hpkotowaza>)、2022年3月24日。

#### 学会発表

「埋葬地から見るスワヒリ農村の家族観—ボンデイ社会の埋葬事例—」、日本宗教学会第80回学術大会、関西大学千里山キャンパス（オンライン）、2021年9月8日。

#### 講演

「タンザニア・ボンデイの言語に対する意識とその変化」、地球ことば村・世界言語博物館、慶應義塾大学三田キャンパス（オンライン）、2021年4月17日。

## 竹内愛

#### 論文

「『復興キーパーソン』のレジリエンス要因に関する一考察：ネパールの旧王都パタンにおける大地震復興過程を事例として」『共生の文化研究』16:126-146。

## 学会発表

「グローバル化におけるネパールの災害復興のネットワーク－ネパールの被災地パタンと在日ネパール人コミュニティの関係から－」、国際開発学会第32回全国大会、金沢大学（オンライン）、2021年11月21日。

## その他

「グローバル化におけるネパールの災害復興のネットワーク－ネパールの被災地パタンと在日ネパール人コミュニティの関係から－」『国際開発学会第32回全国大会要旨集』SessionB3:5-8。

## 科学研究費助成事業（2021年度採択課題）

氏名	採択課題		
石原美奈子	基盤研究 (B)	エチオピアにおける郷土史・地方史の体系的収集・分析を通じた多元的歴史認識の解明	新規
渡部森哉	基盤研究 (B)	南米アンデスの初期帝国ワリの成立と地方支配に関する研究	継続
川浦佐知子	基盤研究 (C)	合衆国西部の水利権係争に働く部族主権の検討：モンタナ州水利権合意に焦点をあてて	新規
後藤明	基盤研究 (C)	人類学が我が町にやってくる！：デジタル・アンソポリウムの構築	継続
吉田竹也	基盤研究 (C)	バリと沖縄の楽園観光地に生きる観光サバルタンの事例考察を通じた観光リスク論の探究	継続
中尾央	基盤研究 (C)	戦争と道徳性の進化に関する自然哲学的考察	新規
ANTONY Susairaj	基盤研究 (C)	新興中間層の台頭とインド映画の新局面：新ジャンルの成立と映画産業の変貌を焦点に	継続
張玉玲	基盤研究 (C)	福建省福清出身華人の移住および同郷紐帯の拡大と文化的・社会的制度としての「故郷」	継続
藤川美代子	若手研究 (B)	船上生活者の教育と福祉に関する文化人類学的研究：日本・中国の都市部と村落部の比較	継続
藤川美代子	若手研究	海洋生物の捕獲と養殖をめぐる文化人類学的研究：中国・台湾・フィリピンの事例から	継続
宮脇千絵	若手研究	現代中国における少数民族女性の稼得労働とエスニシティに関する人類学的研究	継続
中尾央	新学術領域研究 (研究領域提案型)	三次元データベースと数理解析・モデル構築による分野統合的研究の促進	継続
中川朋美	研究活動 スタート支援	弥生時代における暴力の社会的影響	継続
竹内愛	研究活動 スタート支援	ネパールの旧王都パタンにおける女性自助組織と災害：震災とパンデミック	継続

## 刊行物 【2021年度】

### 刊行物

---

- 人類学研究所（編） 『年報人類学研究』 第12号（2021年6月30日発行）
- 人類学研究所（編） 『Asian Ethnology』 Volume 80, Number 1（2021年7月18日発行）
- 人類学研究所（編） 『Asian Ethnology』 Volume 80, Number 2（2022年1月21日発行）
- 人類学研究所（編） 『人類学研究所通信』 第21号（2021年7月31日発行）
- 人類学研究所（編） 『じんるいけん Booklet 2021 Vol.8 フィードバック：戦後における補聴器が成したリズム感形成（モンデリ・フランク）（人類学研究所公開講演会「デジタル時代における障がいと日本」シリーズ講演録）』（2022年3月1日発行）

### Asian Ethnology Podcast

---

1. Interview with Susanne Klien: Urban Migrants in Rural Japan  
(<https://asianethnology.org/page/podcastklien>)  
Interviewer: Ben Dorman  
Recorded 11 March 2021
2. Interview with John Powers: Tibet's Rivers, Climate Change, and Environmental History  
(<https://asianethnology.org/page/podcastpowers>)  
Interviewer: Ben Dorman  
Recorded 15 March 2021

### Asian Ethnology Series

---

1. Interview with Steven Fedorowicz: Deaf Communities in Japan  
Interviewer: Mark Bookman  
Recorded 17 February 2021



## 人類学 研究所 スタッフ

所長	渡部森哉	人文学部人類文化学科・教授
第一種研究所員	DORMAN, Benjamin 宮脇千絵	外国語学部英米学科・教授 人文学部人類文化学科・准教授
第二種研究所員	ANTONY, Susairaj 石原美奈子 川浦佐知子 CROKER, Robert 後藤明 張玉玲 中尾央 藤川美代子 PETERSEN, Esben MUNSI, Roger Vanzila 吉田竹也 RIESSLAND, Andreas	人文学部人類文化学科・講師 人文学部人類文化学科・教授 人文学部心理人間学科・教授 総合政策学部総合政策学科・教授 人文学部人類文化学科・教授 外国語学部アジア学科・教授 人文学部人類文化学科・准教授 人文学部人類文化学科・准教授 外国語学部ドイツ学科・講師 国際教養学部国際教養学科・教授 人文学部人類文化学科・教授 外国語学部ドイツ学科・准教授
博士研究員	中川朋美	博士研究員
研究員	高村美也子 竹内愛	プロジェクト研究員 プロジェクト研究員

## 非常勤 研究員 [2021年度]

氏名	研究課題
濱田琢司 (関西学院大学文学部・教授)	「近代化」と「伝統性」をめぐる工芸産地の実践に関する研究について
角南聡一郎 (神奈川大学国際日本学部・准教授)	金関丈夫・国分直一による台湾での学術活動と戦後の人類学／考古学——物質文化からの眺望
藏本龍介 (東京大学東洋文化研究所・准教授)	ミャンマーの仏教NGOに関する文化人類学的研究
中尾世治 (京都大学 大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・助教)	西アフリカにおける「国家をもたない社会」のふたつの歴史——人類学史とフィールドの歴史との交錯としての歴史人類学
森田剛光 Susanne Klien	新型コロナウイルス感染症(COVID-19)による移動・生活制限と滞日ネパール人 Transnational mobile Japanese selves in Europe, moratorium migration and the quest for subjective well-being outside Japan
杉尾浩規 山崎剛 小坂恵敬 菅沼文乃	アタッチメントと発達に関する人類学研究の動向と展望 暮らしとともにある人類学の研究 バブアニューギニアの国民通過と伝統的通過の歴史的使用にみる人格論 沖縄都都市部の高齢者を事例とする"生きがい"の人類学的研究——「自分史」をキーワードとして
野澤暁子 梅津綾子 佐藤純子 辻輝之	中世ジャワ・ヒンドゥー文化の伝承と伝播に関する音楽人類学的研究 日本で生きるマイノリティ親子・家族の生き方——性的少数者、ムスリムの観点から仮面——その根源的意味の考察にむけて 書籍出版計画 Sharing Mother: Sociality, Spirituality, and Sexuality of the Walking Stature等
Frank J. Korom Patrick McCartney	Guru Bawa and the Making of a Transnational Family Global Yogascapes across the ASEAN Regional Forum(ARF): Transformative Travel, Competitive Diplomacy and Faith-based Development
Paul Capobianco 須田征志	Foreing(er) Performances in Japan タンザニアにおける伝統医療従事者の知識の共有とモノを介した社会性に関する人類学研究
岡本圭史	アフリカ都市における異人像の人類学的研究——ケニア、ドゥルマ社会の悪魔崇拜言説
Mark Bookman	Local Politics and Global Accessibility: Disability Activism and the 2020 Olympic and Paralympic Games in Tokyo
Michael Gillan Peckitt 加藤英明	Representations of Disability in the Japanese Media after Sagami-hara 工場における技術人類学的研究——マニュアル化と技能をめぐる作業者の実践を事例として
佐藤 吉文	先スペイン期アンデスにおける頭髪とは何か:非二次元ジェンダーの考古学的研究に向けて

人	類	学
研	究	所
通	信	第22号

2021

2022年7月31日刊行

南山大学人類学研究所

Anthropological Institute, Nanzan University

編集責任者: 宮脇千絵

編集委員: 渡部森哉、ドーマン・ベンジャミン、藤川美代子

事務局: 古澤夏子

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

TEL: 052-832-3111(代表)

Website: <http://rci.nanzan-u.ac.jp/jinruiken/>



デザイン: 株式会社サウザンドデザイン